

インドネシア・スンバ島西部の在来暦法

— 「苦い月」と「ゴカイ月」をめぐる地域間シグナル伝達の分析から —

古澤 拓郎*

Indigenous Calendar System in Western Sumba Island, Indonesia: Analyses of Inter-Area Signal Transmissions for the Month of Bitterness and the Month of Sea Worms

FURUSAWA Takuro*

This study aimed at revealing the technologies involved and functions of indigenous calendar systems in West Sumba, Indonesia, through analyses of intercalation methods, inter-area synchronization methods, and the reality of time reckoning. I found that the observation of the solar cycle in a mountain-top village in Lamboya District played a determinative role in the intercalation and times of the Loli and Wanokaka Districts, which were synchronized to this cycle through the *Podu* and *Pasola* Rituals, respectively, in the Month of Bitterness and the Month of Sea Worms. In addition, the Loli District played a key role in the inter-area synchronization of the ‘end of the year’ beyond district boundaries, while the Lamboya and Wanokaka Districts cross-checked the existence or absence of a natural phenomenon: sea worm (*nyale*) swarming. People recognized the Month of Bitterness as predicting the coming of the rainy season and the period for preparing garden crops (e.g. maize and millet) and the Month of Sea Worms as the end of the peak of heavy rains and the start of the period for planting rice in paddy terraces. In conclusion, this study found that the indigenous calendar was not fixed in a form of ‘cells’ but was flexible based on certain solar, lunar, natural, and cultural signals. This is a simple technology and a non-conscious calendar but it is very adaptive to these people’s subsistence and is potentially resilient to extreme weather events.

1. はじめに

各社会は地域の生態環境に立脚し、人々の生存に役立てられる在来知 (indigenous knowledge) として、伝統的な暦知識とそれを運用する技術すなわち在来暦法を発達させてきた [片山 2012]。しかし多くの社会では、西洋社会との接触以降にそのような在来暦法は精度が低く、

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2017年6月15日受付, 2017年8月13日受理

非科学的なものであるとされ、西洋太陽暦であるグレゴリオ暦に置き換えられてきた。これは、グローバル化社会において共通の暦をもつことにより商業活動や政治的・社会的約束事を支障なく行なうためでもあった。こうした中で在来暦法をめぐる在来知、たとえば暦法の基礎となる天体知などが失われつつあり、喪失の前にそれを解明し記録しておく必要が生じている。また在来知がいわゆる科学知よりも有用である場合があることが知られるようになり [Furusawa 2016]、在来天体知も「喪失の危機」から「ネオサイエンス」として注目をされるべき可能性を備えている [後藤 2014]。

インドネシア共和国東ヌサテンガラ州のスンバ島は経済発展著しいインドネシアの中でも取り残されたようにグローバル化の影響が限られており、畑作や水田稲作という伝統的生業への依存が大きく、さまざまな面で伝統文化による営みが続けられている [Müller 1997]。この島は雨季乾季が明瞭な熱帯モンスーンからサバナ気候に位置するため、時間の限られた雨季の開始とその終わりを在来暦法によって予測することが生存のためにも重要である [Monk *et al.* 2013]。特に同島西部においては今でも在来暦法が祭りなどの伝統行事や生業を営むうえで重要な役割を担っている。ただし州・県政府などの公的機関や学校教育ならびに商業活動はグレゴリオ暦が用いられるようになっており、徐々に社会も変わってきている。

スンバ島の在来暦法研究は古く、20 世紀後半に盛んに行なわれた文化人類学的研究でも調査された [Hoskins 1993; Geirnaert 1989; Gunawan-Mitchell 1981; Forth 1983; Barnes 1974; Keane 1997]。その中から後述する置閏 (intercalation) や同期 (synchronization)¹⁾ が行なわれるという特徴が見出されており、それは島嶼部アジアからオセアニアの広域に分布するオーストロネシア諸語系統の言語を話す集団 (以下、オーストロネシア諸語集団) にみられる要素である [Forth 1983; Gunawan-Mitchell 1981; Hoskins 1993; Geirnaert 1989; Yoshida 1980; Leach 1950; Fowler 2016]。しかしながら、これら多くの研究にもかかわらず、その置閏や同期の技術的なメカニズムが明らかにされることがなかった。

そこで本研究は、これまでの研究では解明できなかったスンバ島西部の在来暦法の技術と機能を明らかにすることを目的とする。この目的にあたり、まずオーストロネシア諸語集団における在来暦法の特徴である置閏法、同期法、そして置閏法無自覚という 3 点について文献研究を行なう。それからスンバ島の在来暦法についてすでに明らかになったことと、明らかにならなかったことを抽出し、本研究で解明すべき問いを明確にする。その後参与観察と聞き取りを通して、これらの問いに答えることとする。

1) 暦法に関する文化人類学的研究のほか、生物時間学、生理学などにおいても時間に関する用語がある。同じ個体が互いに時間または周期を合わせる「同期 (synchronization, synchronism, synchrony)」以外にも、自律的な周期が外部環境の周期に影響される「同調・エントレイメント (entrainment)」、中枢神経が末梢神経の時間を合わせる「調律 (tuning)」などの用語がある [富岡ほか 2003]。心臓のリズムを調律と呼ぶこともある。本論文では同期の語を用いるが、同調や調律の要素を含む場合がある。

最後に、従来の研究では現代のカレンダー概念に基づいた「セル型」の理解を試みていたために在来暦法の技術を解明できなかったことを指摘し、改めて在地の時間概念に基づいた「シグナル伝達」という形で理解することを提案するものである。

2. オーストロネシア諸語集団における在来暦法の技術

2.1 在来暦法とは

暦という単語は、太陽・月・恒星などの運行を観察・計算して季節や月日を定めた暦法を指すことに加え、それを記録・印刷したいわゆるカレンダーを意味することもあり、さらに各種の行事暦のように時間に合わせたものごとの変遷を指すこともある [岡田 2002; 岡田ほか 2014]。暦の代表的な機能としては、自然の変化を把握し、いつ雨季になるか、いつ魚の群れが来るか等を予測し、農耕・漁撈・狩猟・採集を行なうために用いられることが挙げられる。また、暦を定めることは時間を管理することであり、儀礼の執行、商業活動の管理、社会の統治と政治にも用いられる。暦法研究において最も原始的な暦（原始暦）とされるのは、四季のような自然変化に応じて生活を営む道標として、季節変化に名前をつけて目安を設けた、自然暦と呼ばれるものである。より発展した暦は太陽・月・恒星などの巡りが循環していることに基づいて、その周期の目印を特定・記録してできた暦法である。さらにそれが発展すると、天文学や数値計算に裏付けされて権威者により頒布された制定暦となる [岡田ほか 2014: 3-4]。自然暦も広義の在来暦法に含められるが、本稿における在来暦法とは周期に基づいて時期を特定している暦法を指すこととする。

地球が太陽を1周する周期、すなわち太陽周期を1年と定めて暦を作ると、毎年同じ月日と同じ季節にすることができる。観測と計算に基づく、この太陽周期は約365.2422日である [片山 2012]。日本をはじめ現在世界標準となっているグレゴリオ暦は、平年は1年365日であるが、4年に1回閏年があり、さらに100で割り切れる年は閏年にしないが、400で割り切れる年はやはり閏年にする、という細かなルールがあり、これで平均365.2425日になっている。まだ太陽周期とはわずかな誤差があるが、あまりに複雑すぎると実用的ではないため、このルールが普及している [片山 2012]。グレゴリオ暦は季節周期と合うすぐれた暦であるが、長期間精密な観測がなければこのような太陽周期を知ることができなかった。古代ローマ以来の天文学の結果としてまずユリウス暦が成立したのが紀元前45年であり、さらにグレゴリオ暦が発布されたのは1582年になってからである。

一方、月が地球を1周する周期、すなわち太陰周期を1月と定めた暦は、古代ローマも含め世界各地で暦の基礎となった。太陰周期のことは、朔（新月）から上弦を経て望（満月）に至り、下弦を経て再び朔に戻る、朔望周期とも呼ばれる。朔望周期は月の満ち欠けを見るだけで分かるし、海の潮汐周期とも同調し、さまざまな生物の生態とも一致することから、生業

活動にも有用である [富岡ほか 2003]。朔望周期は、時期によって若干長短があるが、平均すると約 29.53 日である。多くの太陰暦がそうであるとおりに、29 日の月（小の月）と 30 日の月（大の月）を交互に繰り返すと、平均 29.5 日になるので月の周期に近い。しかし、これを 12 回繰り返しても 1 年は 354 日にしかならない。つまり、太陽の動きとは毎年約 11 日もずれていく。²⁾ このように太陰暦は便利な面もあるが、太陽の動きとずれてしまうと季節変化を予測する暦としては役に立たなくなるという欠点がある。

このため太陰暦をもとにしながらも、太陽の動きに合うように修正を行なう暦が各地で発達してきた。広くみられるのは、平年は朔望周期の月を 12 回繰り返す（約 354 日）が、閏年には 13 回繰り返す（約 383.5 日）ことで調整するものである。この 13 番目の月は閏月と呼ばれ、これを挿入する時期を決定する規則を置閏法と呼ぶ。たとえば十九年七閏法と呼ばれるものは、高度な天体観測に基づくメトン周期に基づいて 19 年間に 7 回閏月を入れる置閏法であり、日本における旧暦など、中華圏で用いられた太陰太陽暦がそれである。旧暦では太陰周期の観測とは別に、二十四節気という太陽周期の精密な観測と計算に基づいている。なお太陰太陽暦でもインド国定暦の置閏法では、独自の観測と計算に基づいて閏月を加えるだけでなく、欠月として月を飛ばすことで同期することもある。一方、そのような観測技術をもたない社会では、より素朴な技術の太陽観測、太陽以外の天体の観測、気象や自然変化の観測を用いる。このように、暦法においては太陰周期の暦を太陽周期に合わせる置閏法に文化差があるのである。

本論文では伝統的な暦であっても、公的な制定暦と在来暦法を区別する。各地にある伝統的な暦の中には、公的な制定暦として頒布されたものがあり、世界的には旧暦・中国暦のほかにも、インド国定暦やタイ暦が挙げられる [岡田 2002]。インドネシアにおいては国全体でグレゴリオ暦が用いられるが、イスラーム教徒が国民の大半を占めるために、純粋太陰暦のイスラーム暦も公的に用いられ、ラマダーンの日取りやイスラーム暦新年の祝日などは国家行事になる。さらに地方ごとに公的に用いられる暦もある。バリ島のバリ暦（バリ・サカ暦）はインド暦の影響を受けた太陰太陽暦であり、精密な計算に基づいている [五十嵐 2008]。バリ暦はバリ州（バリ島）でしか用いられてないが、その新年にあたるニュピ (*nyepi*) には国際空港も原則閉鎖され、州の公的機関・商業機関も含めて地域の休日になるのであり、公的制度で採り入れられているといえる。

一方、本研究が着目する在来暦法はそのように体系立てられておらず、文字として記録されたことも稀であるが、各地で在来の知識と技術に基づいて用いられてきたものである。たとえばバリ島にはバリ暦のほかにも、地域や村ごとに恒星等を目印にした独自の在来暦法がある

2) 純粋太陰暦であるイスラーム暦にしたがって行なわれる行事は、グレゴリオ暦のカレンダーの日付でみると毎年早くなっていくように見える。

[五十嵐 2008]. インドネシアは、グレゴリオ暦のほかにも高度に計算された公的な伝統暦法と、技術的には素朴な各地の在来暦法が共存する、いわば暦法の多元論的状况にある。

2.2 置閏法

スンバ島を含む小スンダ列島やマルク諸島などの東インドネシア島嶼部は地理学的にはアジアに分類されるが、社会や文化と遺伝学的特徴にはオーストロネシア諸語集団の要素が多く見出される [Yoshida 1980; Lipson *et al.* 2014; Igarashi 1997; Leach 1950]. そこでまず、先行研究をもとにオーストロネシア諸語集団の在来暦法の特徴をまとめる。

太陰周期で毎月を数えつつも、太陽周期と一致させるための置閏法は、大きく分けて以下の3つにまとめられる：

- (1) 太陽周期観測法
- (2) 恒星周期観測法
- (3) 自然周期観測法

まず太陽周期観測法は、文字どおり太陽周期と一致させるものである。太陽の上る地点や、上った軌道・高さなどを計測する必要がある。オーストロネシア諸語集団ではあまり報告がない [Yoshida 1980].

次に恒星周期観測法は、太陽とほぼ同じ周期で変遷するさまざまな恒星・星座を観測するものであり、観測対象が多く、観測自体も比較的容易であるために、多くの社会で用いられている。夜空に浮かぶ恒星の顔ぶれは季節により異なり、ある恒星は一年のある季節になると地平線の下にある、もしくは太陽が昇る日中に空に浮かぶために見えなくなるが、別の季節が到来すると、夜明け前の空に見られるようになる。このようにしばらく見られなかった恒星が、再び見られるようになることをヒライアカルライジング (heliacal rising) という。逆にある時期になって、その恒星が見られなくなることはヒライアカルセッティング (heliacal setting) という。このヒライアカルセッティングとヒライアカルライジングの間を伏と呼ぶ。例としてはプレアデス星団 (別名すばる) のヒライアカルライジングはインドネシアのバリ島やロンボク島から南太平洋のトンガまでの広範囲で用いられている。オリオン座 β 星リゲルはニュージーランドのマオリ人に用いられ、さそり座 α 星アンタレスが小スンダ列島東部やマルク諸島などで用いられる [五十嵐 2017; Yoshida 1980].

最後に自然周期観測法は、周囲の自然の季節的变化を見ることで太陽周期に合わせるものであり、これもさまざまな社会にみられる。たとえばフィリピンのルソン島北部先住民では川の流量変化、ある種の樹木の開花、渡り鳥の動きなどを見て、季節を分け、農事を行なう自然暦をもつ [Scott 1958]. 通常こういった自然現象は、エルニーニョ南方振動のような数年周期の不規則な変化や、短期的で偶発的な気象現象の影響を受けやすいため、毎年特定の時期に太陽周期と一致させることは難しい。しかし、多毛類生物いわゆるゴカイ類が行なう生殖群泳は

非常に規則正しく起こる [古澤 2016a]. サモアでは毎年 10-11 月の満月から約 7 日後に、イソメ科の太平洋パロロと呼ばれる種 (*Palola viridis*) が大量に浜辺に発生して生殖群泳を行なう。この種は海底に棲息しながら、オスとメスがそれぞれ精子と卵を体の後部に充満させて体から切り離し、それが海面に浮上し受精するのである。なお他の種 (ゴカイ科カワゴカイ属など) には、体の一部を切り離すのではなく、生殖変態をした個体自体が浮上して群泳し受精するものもある [佐藤 2016]. ゴカイ類は光を感知していることが知られており、月の周期を感知してこれを行なっていると考えられているが、太陽の周期を正確に把握するメカニズムはいまだ解明されていない [佐藤 2006]. サモアではこの生殖群泳を見て、新年の始まりとしている [A Member of the Samoan Society 1928; Leach 1950]. 本研究でもこのゴカイ類の生殖群泳は重要な分析対象であり詳しくは後述するが、東部インドネシアの小スンダ列島やマルク諸島における生殖群泳の時期は 2-3 月頃である [五十嵐 2017; 古澤 2016b].

なおバリ暦では閏月・閏日を加えるだけでなく、逆に月や日を数えない欠月・欠日が定められ、暦法研究ではこれも広義の置閏法の一形態としてとらえられている [岡田ほか 2014]. 本稿ではオーストロネシア諸語集団の暦法が上述のような周期観測をもとに月や日を足したり、数えない月や日を設けたりすることで太陽周期等と同期させることは、厳密な法則の観察や計算に基づいておらずとも、広義の置閏法に含めることとする。

2.3 同期法

オーストロネシア諸語集団のうち、いくつかで共通してみられる特徴として、隣接する地域の間で、異なる暦が用いられているにもかかわらず地域間で時間を同期しているというものがある。これを本論文では同期法と呼ぶ。よく知られている例として、プロニスワフ・マリノフスキによるトロブリアンド諸島の研究がある。『西太平洋の遠洋航海者』にも書かれたように、ミラマラ *Milamala* と呼ばれる収穫祭は重要な儀礼である [Malinowski 1922, 1927]. この儀礼は東部キタヴァ島では 6-7 月に行なわれ、キリウィナ島の南部と西部では 7-8 月、同島の中央部と東部では 8-9 月、そして南方にあるヴァクタ島では 10-11 月にある。そのため儀礼は地域により 4 ヶ月もずれる。この儀礼が行なわれる月名はミラマラであり、ミラマラという月もそれに応じて最大 4 ヶ月ずれる。また、隣接地域の間で、よその地域が今何の月であるかを確認することで、自地域の月が何であるかを認識する。農耕活動は暦に応じて行なわれるため、ミラマラ月の違いに応じて農耕活動もずれ、そして収穫祭のずれへと帰結する [Malinowski 1916, 1927]. マリノフスキは、トロブリアンド諸島の暦は恒星周期観測に基づく恒星太陰暦とみなしていたが、ヴァクタ島ではゴカイ類の生殖群泳によって決定しているという情報があることと、そのゴカイ類の現地名もミラマラであることを記録している [Malinowski 1927]. その後リーチはヴァクタ島では、ミラマラという名の月にゴカイ類の生殖群泳が起こらなかつたら、生殖群泳が起こるまでもう一度ミラマラという月を繰り返すことを明らかにし、これが

置閏法になっていると指摘した [Leach 1950]. すなわち平年は朔望周期に基づく 12 ヶ月であるが、もし新しい年として迎えた最初のミラマラという月になっても生殖群泳がみられなければ、閏月が入り 13 ヶ月になるのである [Leach 1950]. リーチによればヴァクタ島がミラマラ月を繰り返した場合には、他地域もそれぞれの月名を繰り返して先に進むのを待つ [Leach 1950]. すなわち地域間で同期しながら閏月を入れているのである. 生殖群泳が起こるのは地理条件的にヴァクタ島だけに限られるが、地域間で常に同期しておくことで、その置閏法を地域一帯で共有することができるのである.

このように地域間で同期しているのは、インドネシアのサブ島 [Fox 1979] や、本研究のスンバ島各地 [Hoskins 1993] でもみられる特徴である. なおサブ島の置閏法は、ヤシ科植物オウギヤシ (*Borassus flabellifer*) の開花時期を見て判断している [Fox 1979], またはオリオン座のヒライアカルライジングを用いている [Kagiya 2010], 雨季の開始をみている [廣瀬 2017] などの説があるが定まっていない.

2.4 小スンダ列島の一部における無自覚な置閏法

小スンダ列島の一部において、置閏法と同期法と並んで、もうひとつ重要なこととして閏月の挿入に無自覚ながら太陽周期と同期させる方法の存在がある [五十嵐 2008, 2014, 2017].³⁾ バリ島のある在来暦法では新年 1 番目の月から 10 番目の月までは、月の現地名があり、月の数を数えているが、11 番目以降は現地名がなくなる. そしてそれ以降の月をまとめて「プレアデスの伏の月 *Sasih Pěngěrēm*」, 「空っぽの月 *Sasih Suwung*」, 「障害 (頭部がない) の月 *Sasih Malä*」などと呼び、月を数えない. ロンボク島ササク暦でも、同様に 11 番目と 12 番目の月には固有の名称がなく、まとめて「空っぽの月 *Bulan Suwung*」と呼ばれる [五十嵐 2017]. 月を数えない期間に入ると、プレアデス星団のヒライアカルライジングを観察するようになる. そしてある夜明け前に、ヒライアカルライジングを観測するや否や次の新月が新年の 1 月とみなされ、そこから月を数え始める.⁴⁾

この理由は以下のように説明される. まず理論上の置閏法では、平年は 12 番目の月にヒライアカルライジングが起こるのを観測して翌月から新年とするし、閏年は 13 番目の月になってヒライアカルライジングが起こるまで待つ. しかし住民にとってみれば 1 年 12 ヶ月の年と 13 ヶ月の年が混在し、今年がそのどちらであるかが後になってみないと分からないというの

3) 五十嵐忠孝氏は 2014 年 11 月に急逝された. 2014 年 7 月 25 日 (金) に開催された研究会『アジアの伝統的暦と天文古記録』(於: 京都大学総合博物館 1 階ミュージアム) における同氏の発表「パロロ, 星, 在来暦法」をはじめとして、生前には閏月の挿入に無自覚な点に着目すべきことを指摘されていた. 同発表ならびに同氏の遺された資料はご遺稿としてまとめられ『東南アジア研究』誌に受理され、編集・印刷中にある. 同氏の理論を包括的に理解してもらうために、まもなく掲載される同論文を引用文献として挙げる.

4) 古代ローマのロムルス暦でも月は 10 番目までしか数えず、その後は月を数えなかったことも似ている [片山 2012].

は混乱のもとになりうる。また年始を決定するヒライアカルライジングの観察は、人間が行なうのであるから、見落としや天候により、年始が1-2ヵ月誤っていることがある。そのためまだ11番目の月なのにヒライアカルライジングが起こるとか、13番目の月が終わってもまだ起こらない、ということがありうる。こういったことは、不規則に欠月を設けたり閏月を2回挿入したりすることに相当し、社会に大きな混乱を起こすことになる。しかし11番目以降の月を数えないことにすると、そういった混乱を回避できる〔五十嵐 2014, 2017〕。本研究ではこのような閏月・欠月に無自覚であってもそれにより自覚的に太陽周期に一致させることも広義の置閏法の一形態とみなすが、狭義の置閏法と区別するために「無自覚な置閏法」と呼ぶ。

小スンダ列島の中でも、たとえばフローレス島リオ地方では農耕や儀礼の周期が太陽周期や太陰周期の中に定められず、自然の変遷に合わせて生業活動が営まれているように〔杉島 1990〕、自然暦が用いられている場合もある。したがって、この列島においては純粋な自然暦から、公的制定暦のバリ暦までが存在し、その間にササク暦のような無自覚な置閏法による暦法があることを念頭に置いておく必要がある。

3. 先行研究におけるスンバ島の置閏法・同期法と残された疑問

3.1 スンバ島の概況

スンバ島は約 11,150 平方キロメートルの面積で、2010 年国勢調査によると人口は 686,113

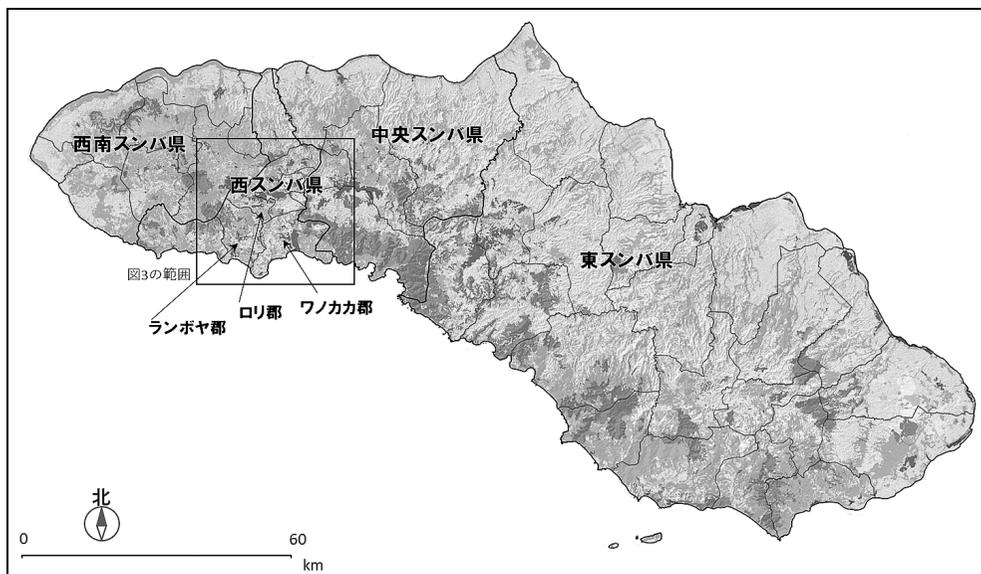


図1 スンバ島における主要調査郡（ランボヤ郡・ロリ郡・ワノカカ郡）の位置
(Badan Informasi Geospasial [2016] および ASTER GDEM2 のデータより筆者作成)

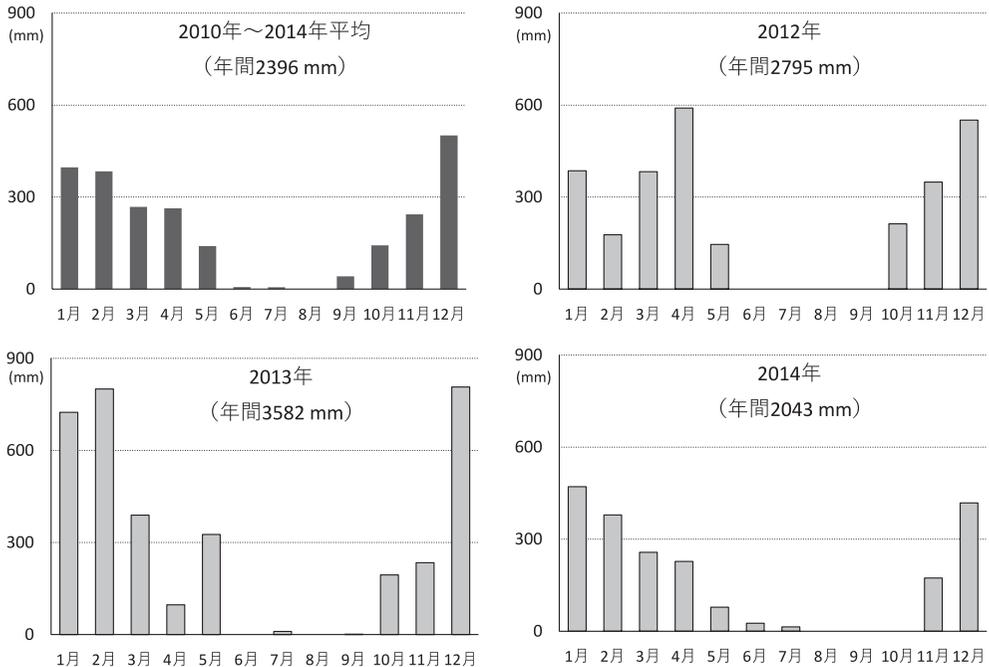


図2 西スンバ県における月別降水量

(Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Barat [2016] のデータより筆者作成)

である [Badan Pusat Statistik 2010]。行政的に2006年までは東スンバ Sumba Timur 県 (県都ワイングプ Waingapu) と西スンバ Sumba Barat 県 (県都ワイカブバック Waikabubak) の2県に分けられていたが、今では西スンバ県が西南スンバ Sumba Barat Daya 県、中央スンバ Sumba Tengah 県、西スンバ県の3県に分けられたため、島全体では4県ある (図1)。西スンバ県における月別降水量を図2に示す [Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Barat 2016]。10月頃から雨季が始まり、5月頃から乾季になる。2010年から2014年の平均をみると年間降水量は2,396 mmである。ただし図2に示すとおり、年により変動があり、2014年には雨季開始が11月まで遅れたうえ年間降水量も少なかった。島を東西で比べると、西部で降水量が多く人口も比較的稠密であり、水田や畑作など農業に向いている。雨季開始とともに雑穀やトウモロコシの畑作農耕を開始し、並行して雨で水田に湛水し、やがて雨季中盤の暴風雨の季節 (12月-1月頃) が過ぎると、田植えを行なう。畑作物は雨季後半頃から収穫が開始され、稲は在来品種だと乾季半ば頃に収穫される。今では品種改良米を用いれば2期作も可能である。

言語データベース「エスノログ Ethnologue」はスンバ島から7言語を登録しているが [Simons and Fennig 2017]、実際にはもっと多いとする研究もあり [Greenhill *et al.* 2008]、中にはスンバ島西部の3県だけで19言語があるとする研究もある [Kuipers 1998]。

スンバ島はインドネシアの他島に比べて伝統が残っているとされるが、歴史的に外部からの影響が無かった訳ではない。ジャクダン（白檀）の産地とされたことはあるものの、交易に値するものは少なく、歴史上名を残してきたのは 17 世紀から 20 世紀初頭までスンバワ島、フローレス島、スラウェシ島などの在来勢力とオランダ人、ポルトガル人などの外国勢力により東インドネシアで繰り広げられた奴隷交易における奴隷の産地としてであった [杉島 2014; 小池 2004; Needham 1983, 1987]。オランダ植民地政府は 19 世紀前半から奴隷交易を禁止する政策を取り始めたが、全面停止されたのは 20 世紀前半のことであった [杉島 2006; Sugishima 2006]。奴隷交易の禁止が遵守されるようになると、スンバ島はアラブ人が持ち込んだ馬の産地になった [小池 2004]。なおヨーロッパの記録においては、オランダ人は 1613 年にスンバ島周辺に進出したが、18 世紀初頭まではスンバ島についての知見は乏しく、オランダ東インド会社が 1799 年に解散したのちの 1866 年になってはじめてオランダ植民地政府の監督官がスンバ島に置かれた [小池 2014]。このようにして歴史的に東インドネシア各地や外国社会からの影響を受けた。

ただしこういったヨーロッパの歴史資料に記載されてきたのは、主にスンバ島北岸・東岸部から中央部にかけてであり、南西部については交流の程度は不明瞭であり、少なくともヨーロッパ人との接触はもっと遅かったようである。例としてワノカカ郡においては、オランダ植民地政府がコンタクトに成功したのは 1908 年のことであったとされる [Gunawan-Mitchell 1981]。またスンバ島東部ではいまだに奴隷を自称する個人や氏族があるように奴隷交易の影響をみることができるが、同島西部ではかつていた奴隷あるいはその子孫として区別される人たちはほとんどいない。

実質的には 20 世紀に始まるオランダの植民地支配から、太平洋戦争を経て、インドネシア独立後もしばらくの間スンバ島各地は王領自治区 *swapraja* になっており、複数の王領・王国 *kerajaan* に分かれていた。ただし、現在でもそうであるが、王 *raja* が明確であり、強い権限をもっているのは島東部のほうであり、西部では王が明確ではなく複数の伝統的マラブ *Marapu* 信仰の祭司 *rato* によって自治的政治が営まれてきた。1962 年に、おおむね王領・王国が、そのまま郡 *kecamatan* へと変わった。そのため、多くの地域では、郡ごとに異なる言語があり、社会文化的な集団を形成している。なお本論文では、2 つ以上の郡にまたがる地名、あるいは 1 つの郡内の一部地名を指す場合には、郡ではなく〇〇地域と記載する。

インドネシアの他地域ではイスラーム教やヒンドゥー教が広まったのに対して、スンバ島では在来のマラブ信仰が続いてきた。マラブ信仰は国家に認定された宗教 (*agama*) とは認められておらず、就学や就職で不利になるし、19 世紀末以降にキリスト教の宣教が行なわれるようになった [小池 2014]。それにもかかわらずスンバ島ではいまでもマラブ信仰は残っており、キリスト教に改宗しても日常的にはマラブ信仰に従う人も多い。西スンバ県は特にマ

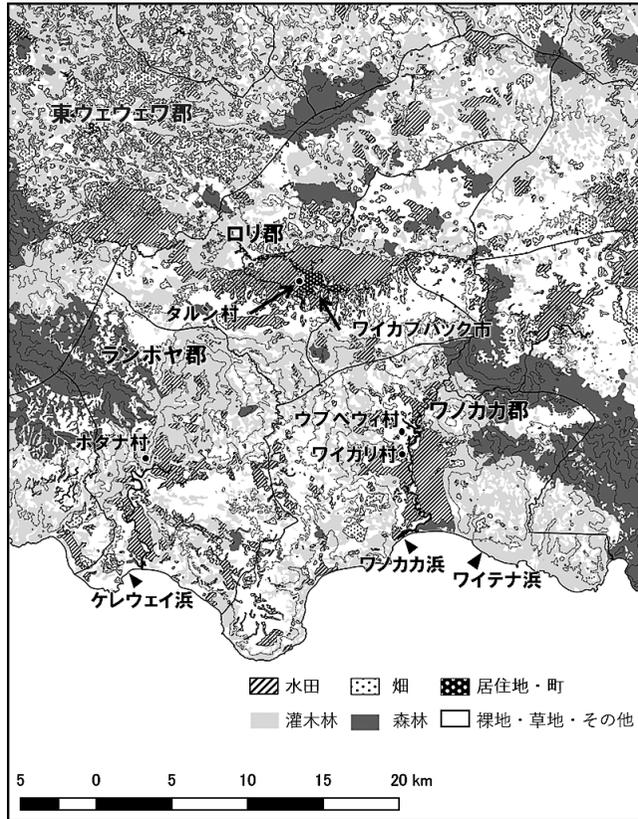


図3 主要調査村とゴカイ類が出現する浜の位置および周辺の地形と土地利用 (Badan Informasi Geospasial [2016] および ASTER GDEM2 のデータより筆者作成)

ラプ信仰が多く、2010年国勢調査で住民の約20%を占める [Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Barat 2016].

本研究の主要な対象地は西スンバ島のランボヤ Lamboya (または Laboya) 郡、ロリ Loli 郡、ワノカカ Wanokaka (Wanukaka) 郡であり、それぞれランボヤ語、ロリ語、ワノカカ語という異なるオーストロネシア語族言語を話す社会である。図3のとおり、ロリ郡は内陸の山間地にあり、ワノカカ郡は沿岸部低地にあり、ランボヤ郡は沿岸部から山間地までを含む [Badan Informasi Geospasial 2016].⁵⁾ ワノカカ郡とランボヤ郡では川が海に流れ込んでおり、川沿いが水田地帯となり、この河口部 (ワノカカ Wanokaka 浜とケレウェイ Kerewei 浜) がゴカイ類の群泳場所である。ロリ郡は県都ワイカフバック市に隣接して、山間盆地が水田地帯となっている。

5) 図の地形情報は ASTER GDEM2 データに基づく。この原データは日本の経済産業省およびアメリカ航空宇宙局 (NASA) に帰属する。

表 1 先行研究 [Hoskins 1993] におけるランボヤ郡・ロリ郡・ワノカカ郡の暦比較

グレゴリオ暦でのおよその月						
	1月	2月	3月	4月	5月	6月
ランボヤ郡	Mangata	Nale	Nale Gouru	Nale Moro	Ro Huli	Nale Ngisi
ロリ郡	Mangata	Nale Lamboya	Nale Wanokaka	Nale Mubbu	Ngura	Boda Rara
ワノカカ郡	Hi'u	Nyale Laboya	Nyale Wanokaka	Ngura	Tua	Bada Rara

グレゴリオ暦でのおよその月						
	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ランボヤ郡	Nale Mabu	Kabba Ro Yayu	Kabba Pari Biru	Padu Lamboya	Padu Patialla	Kabba
ロリ郡	Meting Katiku	Menamo	Pattina Mesi	Podu Lamboya	Podu Lolina	Koba
ワノカカ郡	Metingo Katiku	Oting Mahing	Dapangara/Pidu Tou Dangu	Pidu Laboya	Ka'a	Mangata

* 太字は「ゴカイ月」と「苦い月」に相当する時期。各月名の意味については表 2 を参照。
 注) 綴りはできる限り原典に忠実にしたが、禁忌からの解放を意味する *kabba* (ランボヤ郡), *koba* (ロリ郡), *ka'a* (ワノカカ郡) と、カボックノキないし綿を意味する *kaba* (ランボヤ郡・ロリ郡・ワノカカ郡) との混同を避けるために、前者の意味で *kaba* と誤記されていたところは修正した。

表 2 ランボヤ郡・ロリ郡・ワノカカ郡における月名の意味

月名 (日本語訳)	意味
Mangata (マンガタの月)	マンガタという名の白い花のこと [Hoskins 1993]. 筆者がロリ地方で確認したものはサギソウ属 (ラン科) の 1 種であった。
Hi'u (巣作りの月)	巣作りを意味する [Hoskins 1993; Mitchell and Gunawan 2008a]. コディ地方では鳥の巣作りであるのに対し [Hoskins 1993], ワノカカ郡では豚の巣作りを意味する ([Mitchell and Gunawan 2008a], 現地調査)。
Nale, Nyale + 地名 (ゴカイ月)	多毛類の 1 種または複数種を指し、それが海面で生殖群泳する時期。ランボヤ郡 (Lamboya, Laboya), ワノカカ郡 (Wanokaka, Wanukaka), ガウラ地方 (Gouru, Gaura) など地名が形容詞的につき、出現場所が指定される [Hoskins 1993]. Renge も固有名詞であるが何を指すかは不明。
Biha (禁断の月)	ワノカカ郡ではゴカイ月の別名として禁断の月、神聖な月を意味する <i>biha</i> と呼ばれることもある (現地調査)。
Nale Moro (生のゴカイ月?)	ホスキンスによると <i>nale moro</i> で生のゴカイを意味する [Hoskins 1993]. 他の先行研究や現地調査ではこの月名は登場しなかった。ランボヤ語で <i>moro</i> は「盲」や「緑色」の意味もある [Rina and Kabba 2011].
Nale Mubbu, Nale Mobbu, Nale Mabu (ゴカイが消える月)	ゴカイ類がボロボロに崩れてしまう意味であるが、ゴカイ類が消えていく様子を表すという ([Hoskins 1993], 現地調査)。
Ngura, Ngurra, Nyale Ngura (幼いイモの月)	イモ類がまだ小さく、熟していないことを指す [Hoskins 1993]. ランボヤ郡の <i>nyale ngura</i> も同じ意味であるが [Geirnaert-Martin 1992], なぜ <i>nyale</i> という語が入るかは不明。

表2 続き

月名 (日本語訳)	意味
Tua, Tuwa, Nyale Tu (熟した月)	前月との対比で、イモ類が熟していることを指す [Hoskins 1993]. ロリ地方では畑の収穫物をささげる儀式がある (現地調査). ランボヤ郡の場合は <i>nyale tu</i> ということもあるが [Geirnaert-Martin 1992], なぜ <i>nyale</i> という語が入るかは不明.
Ro Huli (ヤムイモ葉の月)	野生ヤムイモの葉を意味する [Hoskins 1993].
Boda Rara, Bada Rara, Badi Rara (赤い稲の月)	稲が赤くなったという表現であるが, 稲穂が黄色く実り収穫時期を迎えつつあることを示す [Hoskins 1993].
Lima (5 番目の月)	数字の 5. 月名が無い, もしくはあってもそれを知らない場合に数字で回答された (現地調査).
Mahera Makahi Kari (水牛を休ませる月)	水田での作業が終わった後に水牛 (<i>kari</i>) を回復させる時期. 水牛を鞭打つのに使った杖を川に流すなどの儀礼を行なう (現地調査).
Magowo Wulu Hura, Wolu Hura (稲穂が垂れる月)	直訳すると「ニワトリの尾羽 (<i>wulu bura</i>) を釣る (<i>magowo</i>)」であるが, 稲穂が垂れ下がる様子を指す [Geirnaert-Martin 1992]. ランボヤ語で <i>bura</i> は櫛を意味することもある [Rina and Kabba 2011]. また男たちが新米を食べる時期であるともいう (現地調査).
Nale Ngisi, Nyale Ngih (稲粒が膨らんだ月)	中身がある, 妊娠しているの意味であり, 転じて主に稲の粒が膨らむことをいう [Hoskins 1993; Geirnaert-Martin 1992]. なぜ <i>nale</i> (<i>nyale</i>) という単語が入るかについては確認取れず.
Meting Katiku, Metingo Katiku, Metingu Katiku (黒頭の月)	黒い頭の意味であるが, 村人総出で稲穂の刈り取りをする月であり, 頭がたくさん田に連なることからこの名がある ([Hoskins 1993], 現地調査).
Sarubu, Sarobu (稲刈りの月)	稲を刈る (切る) の意味. 上記の黒頭の月の別名 (現地調査).
Menamo, Manamo (脱穀の月)	脱穀のことであり, 皆で足で踏んでもみ穀をとるという ([Hoskins 1993], 現地調査).
Kadekara (耕起の月)	畑作物 (雑穀, トウモロコシ, 根茎類, 陸稲) のために土地を耕起する (現地調査).
Oting Mahing, Pattina Mesi, Patina Mahi, Patina Mehi Taina Maesi, Taina Mesi (塩づくりの月)	塩をゆでるの意味であり, 海水から塩を作る季節 ([Geirnaert-Martin 1992; Hoskins 1993], 現地調査).
Kuru Tanah (土地を閉じる月)	土地を閉じるの意味であり, 上記と同じく塩づくりをする月. 大地が乾燥し農作業が行なえないため陸地を閉じることに由来すると考えられる一方, 塩づくりに土を混ぜることから名付けられたという意見も聞かれた (現地調査).
Palu Dong (藁をたたく月)	収穫後の田で稲藁をたたいたり踏みつけたりして, 歌い踊り陽気に騒ぐこと (現地調査).
Dapangara, Dapa Ngara (名前が無い月)	「(月の) 名前が無い」の意味 [Hoskins 1993].
Siwa, Bani Diha (9 番目の月)	数字の 9. 月名が無いもしくはあってもそれを知らない場合に数字で回答された (現地調査).
Kabba Pari Biru, Kabba Pare Biru (新米を食べる月)	<i>Pari biru</i> (<i>pare biru</i>) は新米を意味する [Hoskins 1993]. かつて, 特に女性はこの月まで新米を食べることを禁じられていたが, その禁忌から解放 (<i>kabba</i>) されて新米を食べ始める時期 ([Geirnaert-Martin 1992], 現地調査).
Kalangu (発狂の月)	発狂すること, 奇行をすることの意味. 暑さによって, このようになるという [Mitchell and Gunawan 2008a].

表 2 続き

月名 (日本語訳)	意味
Podu, Pidu, Padu +地名 (苦い月)	苦い, を意味するが, さまざまなタブーが課せられる神聖な時期. ランボヤ郡 (Lamboya, Laboya), ロリ郡 (Lolina, Tarung Waitabar), ランボヤバワ地方 (Lamboya Bawa, Lamboya Wawa). バリレド地方 (Baliledo), パティアラ地方 (Patialla, Patyala) など地名が特定される. 地名の代わりに「すべての・皆の」(<i>touma danggu, touma dango, tou danggu</i>) を付けることで, 全周辺地域を示唆する (現地調査).
Koba, Kabba, Ka'a (解放の月)	苦い月の翌月であり, 穏やかな月, タブーから解放された月を意味する. ロリ地方では, これが在来暦での新年という認識がある. またこの頃には雨季が始まっており, 畑作物の播種が始まる (現地調査). <i>Ro yayu</i> は枝から葉がでてくる [Hoskins 1993] こと, 特にある種の灌木に葉が付くことをいう ([Geirnaert-Martin 1992], 現地調査). つまり乾季で葉が付くことができなかったのが, 雨季が始まったことで, その状態から解放 (<i>kabba</i>) された状態を指す [Geirnaert-Martin 1992].

* 表 1 だけでなく, 表 4~6 に登場する月名も含む. カッコ内の邦訳は本文中で用いるために便宜上つけたものであり, 確定的なものではない.

主要な調査はロリ郡タルン Tarung 村, ワノカカ郡ワイガリ Waigali 村とウブベウイ Ubu Bewi 村, ランボヤ郡ホダナ Hodana 村にて行なった. これらの村⁶⁾は, 各郡の中核的な村である.

3.2 スンバ島の置閏法と同期法の先行研究

ホスキンスはスンバ島の 12 の異なる地域から暦を集めて比較した [Hoskins 1993]. 表 1 はそのうちから, 本研究対象地であるランボヤ郡, ロリ郡, ワノカカ郡を抽出したものである.⁷⁾ およそグレゴリオ暦と一致するように並べられているが, 在来暦法上は新月から始まる太陰周期が 1ヵ月とされており, 西暦の新年と一致する訳ではない. 表 2 はホスキンスを含む先行研究 [Mitchell and Gunawan 2008a, 2008b; Hoskins 1993; Geirnaert-Martin 1992], 現地語の辞書や単語集 [Rina and Kabba 2011; Mitchell and Gunawan 2008a; Mitchell and Ori 2008], および筆者の現地調査により調べた, 月名の日本語訳と意味である.

表 1 では, ランボヤ郡とロリ郡はグレゴリオ暦 1 月頃がマンガタ *Mangata* という花の月であるが, ワノカカ郡では巢作り *Hi'u* の月となり月名が異なる. しかしその翌月から同期法の存在が分かりやすくなる. まず同 2 月頃ランボヤ郡はゴカイ *Nale* 月となるが, 同じ時ロリ郡

6) 本論文では, 村はインドネシア語の *kampung* に相当する慣習村を指し, 行政村 *desa* とは区別する. またここでは村名を匿名化せず実名で表記する. その理由は, (1) 調査にあたっては研究の趣旨を十分に説明したのちに許可を得たから, (2) これらの村は先行研究においても調査され, 実名で公表されており, 本研究はそれら先行研究との比較が学術的に必要であるから, (3) 伝統知の収集源を正しく記録しておくことが, これらの社会にとっても有益であると考えられるから, である.

7) スンバ島西部の言語については, アルファベットでの表記法が定まっておらず, 同じ発音であっても研究者によって, あるいは住民によって綴りが異なる. 住民によって発音が若干異なることもある. 本論文では, 無理に表記を統一することはせず, 原則として研究者や住民による発音と綴りをそのまま掲載する.

とワノカカ郡は、ランボヤ郡のゴカイ *Nale Lamboya/Nyale Laboya* という月名である。その翌月はランボヤ郡では、ガウラ（ゴウラ）地方のゴカイ *Nale Gouru* 月とされているが、ロリ郡とワノカカ郡は共通して、ワノカカ郡のゴカイ *Nale Wanokaka/Nyale Wanokaka* 月となっている。後述するように、実際はランボヤ郡でもワノカカ郡のゴカイ月と呼ばれることも多い。すなわち、ゴカイ月はランボヤ郡で始まり次の月はワノカカ郡に引き継がれることになる。ガウラ地方はランボヤ郡の西隣に位置するが、暦の調査は行なわれておらず割愛する。

その後は、幼いイモ *Ngura* の月、熟した *Tua* 月、赤い稲 *Boda Rara* の月、黒頭（村人総出の収穫）*Meting Katiku* の月など農業や自然現象に関する月名が続く。ロリ郡、ワノカカ郡では、塩づくり *Oting Mahing* の月もある。しかしこれらの月は、郡ごとに月順がばらばらであるという印象を受ける。

その後、苦い *Podu*（または *Pidu*, *Padu*）月になる。ここでいう *podu* は苦い、ないし苦しいことであり、この月にはさまざまな禁忌を課せられるが、それゆえ神聖な月であるとも認識される。この苦い月でも再び同期法が分かりやすくなる。すなわちグレゴリオ暦 10 月頃にランボヤ郡が、ランボヤ郡の苦い *Padu Lamboya* 月になると、ロリ郡とワノカカ郡も同じ月名 (*Podu Lamboya/Pidu Laboya*) になる。そしてその翌月はランボヤ郡では、パティアラ地方の苦い *Padu Patialla* 月になり、ロリ郡では、ロリ郡の苦い *Podu Lolina* 月になる。つまり苦い月もランボヤ郡で始まり別の地方に伝わっていくのである。後述するようにランボヤ郡でも後の月をパティアラ地方ではなくロリ郡の苦い月と呼ぶこともある。パティアラ郡はランボヤ郡の一地方であるが、ここでは割愛する。

苦い月の翌月には、解放 *Kabba*（または *Koba*, *Ka'a*）の月がある。これは苦い月の禁忌や物忌みからの解放である。先行研究や現地の聞き取りでは苦い月が年末で、解放の月が新年とされることが多い。ただし郡によっては必ずしもそうとはいえない。表においても、ワノカカ郡だけ解放の月がずれているのはそのようなことを表す。

このような月名とその解釈をみると、スンバ島西部の在来暦法は郡・地域、自然現象、太陽、月の間で種を超えて、そして生命体と非生命体という物質の性質を超えて、時間が一致されることが特徴になっている [Fowler 2016]。

3.3 苦い月とゴカイ月の特徴

これらの地域における民族誌研究や農学研究では苦い月とゴカイ月が注目されてきた。この2つの月には大きな共通点がある。まず水田稲作や畑作に関係した大きな儀礼が行なわれることである。苦い月に行なわれるのは、ポドゥ儀礼（苦い儀礼）である。これはランボヤ郡では 10 日ほど、ロリ郡では 30 日ほどをかけて行なわれ、1 年を締めくくる大祭とされる [小野 1976]。一方、ゴカイ月に行なわれるのはパソーラ *Pasola* 儀礼である。これはゴカイ類ニヤレの生殖群泳に伴い行なわれる騎馬戦の大祭であり、ランボヤ郡とワノカカ郡で行なわれる。

もうひとつの共通点はこれらの月にはさまざまな禁忌が課せられ、非日常的な行為が行なわれるが、上述の儀礼終了とともにそういったものから一気に解放されることである。具体的に両方の月には禁忌としては結婚式・葬式をしてはいけないことがある。それからロリ郡を例に挙げると、苦い月は最も重要な氏族祭儀でもあり、日常生活においてあらゆる形で騒がしいことが禁じられる [小野 1976]。またワノカカ郡を例に挙げると、ゴカイ月には赤色の服を着てはいけないことや屋外で火を用いた調理をしてはならないことがある。苦い月は畑作を主とするあらゆる農作業を禁じられる時期があり、ゴカイ月では儀礼が終わるまで田植えを控えることがある。非日常的な行為としては、ロリ郡の苦い月には、男性たちが普段禁じられている狩猟を期間中毎日行ない、獲物が得られたときだけ上述の禁忌を破って太鼓を叩いて踊るなどして騒ぐことが行なわれる。同月にロリ郡とランボヤ郡では割礼や男性成人儀礼が行なわれることも非日常的な行為である。そして儀礼が終わるとともに、日常に戻り、かつ新たな農作業に着手することとなる。これらの月の儀礼祭祀は郡・地域によっても異なり、詳細は先行研究 [Hoskins 1993; Geirnaert-Martin 1992; 小野 1976] に譲る。

共通点の 3 つ目は、先行研究によって年末年始との関係が指摘されたことである。上述のとおり、苦い月が年末で解放の月が年始とされるが、他のオーストロネシア諸語集団でゴカイ類生殖群泳が置閏法に用いられることから、ゴカイ月が新年である可能性も指摘されている [Hoskins 1993; Geirnaert-Martin 1992: 274]。また農学の観点から、グレゴリオ暦の 2 月頃のゴカイ月が新年であるとした研究もある [古川 1991]。

2 つの月に関して異なるのは、山間地にはポドゥ儀礼があり、海岸部にはパソーラ儀礼があるということである。そして郡内に山間地と海岸部の両方があるランボヤ郡は、その両方の儀礼がある地 *tana Podu, tana Nyale* という二行連句で呼ばれる [Geirnaert-Martin 1992]。

3.4 本研究の着眼点

先行研究では、スンバ島のほとんどの地域では月名が 12~14 個であったことから、何らかの目印をもとにして閏月を足す（あるいは欠月を飛ばす）形での置閏法があることが想定され、さまざまな角度から検討されてきた [Hoskins 1993]。具体的には恒星周期観測の可能性が指摘された。たとえばフォースはスンバ島東部での研究をもとにプレアデス星団が空に見えるようになる時期が月名に組み込まれているとし [Forth 1983]、ホスキンスもスンバ島西部コディ地域でその可能性を検討した [Hoskins 1993]。しかし、プレアデス星団のヒライアカルライジングが起こるのは、地形や植生の影響を無視すればグレゴリオ暦の 6 月 4 日頃になるべきであるが、島東部のその月はグレゴリオ暦 12 月頃である。逆に夜明け前の空を毎日観測していて、プレアデス星団が見えなくなる時期が 12 月であるので、記載と逆であるところさえれば一見説明は成り立つ。⁸⁾しかし、プレアデス星団は冬の星座おうし座の一角をなすのであり、夜明けよりも前の時間つまり長い夜の間はずっと夜空のどこかに見えているため、時計

のように「いつが夜明け前であるか」が分かるものが無い限りは、その日を厳密に特定することができないのである。スンバ島中部のアナカラン郡でもグレゴリオ暦 12 月頃のマンガタの月がプレアデス星団と一致するということであるが、同様の疑問が残る [Keane 1990].

グレゴリオ暦の 12 月にヒライアカルライジングが起こるものとしてアンタレスがある。アンタレスもプレアデス星団と並び、オーストロネシア諸語集団で置閏法に用いられる恒星である。小スンダ列島でもロンボク島、バリ島、スンバワ島がプレアデス星団を使うのに対して、スンバ島、フローレス島などではアンタレスを使うという説がある [五十嵐 2014, 2017]. ただしこのうち、スンバ島に関していえば上述のように、グレゴリオ暦 12 月にヒライアカルライジングが起こると記述されたことから逆算して、プレアデス星団ではなくアンタレスを利用していると考えられたためのものである (五十嵐忠孝氏 私信).

これらの先行研究の記述からすると、スンバ島西部において住民がプレアデス星団かアンタレスという恒星周期を観測している可能性はあるが、先述したように苦い月もしくはゴカイ月が年末年始の時期とすると、これらの天体现象とは合わない。また 12 月というのは雨季の中でも特に降雨の多い時期であり (図 2), 天体観測に向かず、誤差を生じやすい時期であることにも留意する必要がある。

自然暦に近いフローレス島リオ地方においては、プレアデス星団とアンタレスが同時に夜に見ることができるのが 9 月頃であり、それが現地の儀礼ポオ *Po'o* の目印になっているとされる [杉島 2017]. これはスンバ島で苦い月が始まる時期とも合う。しかし、地形や植生を無視した場合に天空のどこかにこの両方が同時に現れる期間は数週間におよび (7 月初頭の夜明け前に始まり、9 月初頭には深夜にかけて起こり、11 月半ばの日没直後まで)、実際には 9 月が最も見やすい時期であるものの、厳密に時期を特定できるものではない。リオ地方では儀礼が太陽周期や太陰周期と一致する必要はなく [杉島 1990], 季節を知ることができれば十分であるのに対し、スンバ島西部では両周期との一致が求められるのである。

他に小スンダ列島で利用される天体の動きとしては、ロンボク島やスンバワ島での南十字星のヒライアカルセッティングおよびケンタウルス座 α 星・ β 星のヒライアカルセッティングがグレゴリオ暦 9-10 月頃であり、そしてこれらのヒライアカルライジングが 11-12 月頃とされている [五十嵐 2014, 2017]. スンバ島西部の先行研究でこれらの恒星の役割を明確に記したものは見当たらないが、住民が天体现象を観測していても研究者自身が天体を特定できなかったと記載した場合があります [Geirnaert-Martin 1992: 275], また恒星は特定されていないが月と恒星の位置関係を観測しているという記録もあり [Boro 1995], 住民自身がいずれかの恒星を用いている可能性は排除できない。

8) 本論文では天体现象を検証するためにステラナビゲータ 10 (AstroArts Inc.) を用いた。

またゴカイ類の生殖群泳が置閏法となって新年となる可能性も示されてきたが、意識的に月を飛ばすまたは月を挿入するということが観察されたことはない [Hoskins 1993; Geirnaert-Martin 1992]。なおゴカイ類の生殖群泳は 1 年に 1 回といわれることもあるが [Wacana 1993]、ロンボク島や西南スンバ県コディの記録や生物学的な特性として朔望周期間隔で 2 回ないし 3 回出現している可能性が高い [五十嵐 2014, 2017; Pamungkas 2015]。そうするとゴカイ類の群泳のみを見て厳密な時期を特定することはやはり難しい。このように先行研究が置閏法を論理的に解明することはできなかった。なおコディ地方で暦をつかさどる祭司自身が、そのような在来暦法の置閏法を理解していないことを認めたという記載があることも注目に値する [Hoskins 1993: 338-339]。

同期法にも疑問がある。それはまず年末年始という重要な時期が地域間で一致しないということである。たとえば苦い月が年末であるとした場合に、なぜランボヤ郡の苦い月とその 1 か月後にロリ郡の苦い月という 2 回の苦い月がひとつの暦（たとえばロリ郡の暦）の中に繰り返されるのか。また新年を知らせる解放月が、ワノカカ郡では他の郡とずれるのはなぜか。同様に、ゴカイ月もなぜランボヤ郡とワノカカ郡で繰り返されるのか、ということである。それにもかかわらず、言語（方言）集団を超えてわざわざ月名を同期しているのはなぜなのか。

そして地域間で情報を伝え合い、同期するメカニズムも未解明である。歴史的にこれらの地域は諸民族が群雄割拠し、それぞれの村が丘の上に築かれた要塞のようになり、頻繁に襲撃しあっていたのであり、そのためにお互いに季節を教え合うことはなかったという指摘もある [Hoskins 1993]。

また、暦法の知識は一部の祭司にしか知られておらず、大衆はこの知識を共有していない [Hoskins 1993]。19 世紀後半にスンバ島を訪れたオランダ人ロースも、当時月の名前を知っていたり、今が何の月であるかを答えられたりした住民はほとんどいなかったと記している [Roos 1872]。それならば、生業生存や社会文化のために暦が大きな役割を果たしていなかったとも考えられるが、実際には農業の暦として用いられてきた [古川 1991, 2011]。

このようなことから、スンバ島西部の在来暦法における疑問を解明するカギとして、本研究が特に着目するのは以下である。

- (1) 置閏法として、太陽周期と一致させるための太陽周期の観測や恒星周期の観測を行なっているのか否かと、行なっている場合にはその技術を明らかにすること。
- (2) 置閏法として、ゴカイ類の生殖群泳を観察しているのか否かを明らかにすること。
- (3) 苦い月とゴカイ月が暦の中で果たす役割を明らかにすること。
- (4) 地域の間で時間を同期する仕組みを明らかにすること。
- (5) 実生活において暦が果たす機能と運用を明らかにすること。

4. 本研究が明らかにした置閏法と同期法

4.1 苦い月の置閏法・同期法とその機能

ここからは現地調査によって明らかになったことをまとめる。置閏法についてはランボヤ地方の山上集落ホダナ村では、太陽を観測する祭司 HA 氏（男性・70 歳代）がおり彼の家に滞在して、聞き取りをすることができた。家の脇にはウブ *Ubu* という石があり、この石は神聖で動かすことも、踏んだり、他の祭司が触れたりすることが禁じられている。この家屋の北東隣には「ゴカイ類（ニャレ）の家 *Uma Nale*」という祭祀家屋があり、祭司の家にある男性用出入口、ウブ石、祭祀家屋の支石は 1 直線に並ぶようになる。この直線延長線上から太陽が昇ると、直後の朔（新月）から苦い月になるということであった。GPS（Garmin 社製 *etrex20x*）内臓の電子コンパスで測ってみるとこの直線は真東（真北を 0° としたときに 90° ）であった。すなわち、この方向に太陽が昇るのは秋分の日であり、グレゴリオ暦の 9 月 23 日頃である。なお同じ祭司によると、同じ方向から太陽が昇ることを観測する設備が他にもあるが、祭司以外のものにそれを見せることはできないということであったため、この真偽は明らかではない。これらのことは、同じくホダナ村で調査をしたヘイルナエルト＝マルティンが、具体的な話は聞けなかったものの、住民が何らかの技術で太陽が真東から昇る秋分点を知っているのではないかと推測していたことと一致する [Geirnaert-Martin 1992: 279]。また、月が沈んだのと同じ場所から太陽が昇るのもこの頃であるということであり、これが黄道と白道が地平線で一致する周期を指すのであれば、毎年秋分より前後して変動があることになるが、本論文では便宜上秋分を観測していると表記して進める。また同じく祭司の家から、ウブ石を目印に、そこから遠くに見下ろす村の方向を見たとき、その延長線上から太陽が昇るのがゴカイ月の季節であるということであった。これは東南東の方向であり、電子コンパスでは 116° を示した。

さて太陽周期の観測に合わせることは、当然ながら太陽の動きに同期するための最も正確な方法である。しかし、観測の技術が低い場合には、見誤ったり、見落としたりしてしまい、真東から太陽が昇る日と観測する日の間に数日の誤差が発生する可能性がある。たまたま曇っていたりした場合にも数日ずれる。それが新月の頃にかかると、わずかな観測のずれが 1 ヶ月の誤差を生じさせることになる。そのため太陽を観測していたからといって、誤差がまったく無いとは言い切れないことに留意する必要がある。

なお筆者はひととおり暦法について聞き取りをしたのちに、恒星を観察することが無いかについて質問をしたが、そのようなものはないという回答であった。ヘイルナエルト＝マルティンは恒星を観測する祭司がいるとしたが [Geirnaert-Martin 1992]、筆者訪問時にその祭司はすでに故人となっていた。筆者が聞き取りをした HA 氏はその後最高位の祭司になった人

物であるが、家系は異なる。そのため筆者が聞き取れなかっただけで、恒星を観測していた可能性も否定はできない。

一方、ロリ地方で置閏法を明らかにするにあたり、中核村タルン村で暦法を聞き取り、太陽または恒星の周期を見ているかを祭司 TA 氏（30 歳代）・TB 氏（60 歳代）・TC 氏（40 歳代）らに聞いて回ったが、そのような観測はしていないという回答しか得られなかった。ただし古川 [1991] は 1980 年代のタルン村で恒星を観測する祭司がいたと記載しており、今回は筆者に知識が秘匿されていた可能性は否定できない。もうひとつロリ郡で聞かれたのは、苦い月の期間中には雨季の始まりをつげる最初の雨が降るということであった。雨の開始は年によって変動するが、ポドゥ儀礼が農業と関係していることからすると、この自然周期も参考になっていると考えるのが妥当である。なお祭司 TA 氏から「長い年」と「短い年」があるという話が出された。長い年の特徴のひとつは、苦い月の終わりが 3 日ほど伸びることであり、この場合翌月の解放の月がその分短くなることで年間の総日数は変わらない。もうひとつの特徴は、長い年と短い年では苦い月の開始が 1 ヶ月変わることがあるということであった。そこで同氏に具体的な説明を依頼すると同氏はスマートフォンのカレンダーアプリと月齢アプリを用いて、過去 2 回の苦い月の日程をグレゴリオ暦と月齢上に示し、苦い月の開始がおおむね新月 3 日後に開始されるが、それはグレゴリオ暦の 10 月中旬から 11 月中旬までの範囲で設定されたことを示した。どのようにして開始時期を決定したかについては、回答を得られなかった。しかしいずれの場合も 1 年の月数・日数は変わらなかったと明言した。このようなことを総合すると、グレゴリオ暦 10 月末から 11 月初頭がロリ郡における苦い月の平均的な開始日であるが、しかしその直近の新月がいつ訪れるかに応じて 10 月中旬から 11 月中旬まで開始日に 1 ヶ月程度の変動がありうることを意味すると解釈された。

同期法については、ランボヤ郡が苦い月になりポドゥ儀礼を行なっているという情報をロリ郡が受け取り、それによってその翌月がロリ郡の苦い月になることを祭司や住民が認識していることが明らかになった。具体的には、ランボヤ郡で苦い月が始まると、初日にはパジュラ (*pajura*) という集団ボクシングを行なったのちに広大な山間草地を燃やす儀礼を行なう (HA 氏)。またその後 10 日間の間、ランボヤ郡の人々は奇行や非規範的な行為を行なうようになる。ロリ郡の祭司 TA 氏と女性インフォーマント TD 氏 (40 歳代) と同時に話を聞いていたところでは「ランボヤ郡がポドゥ儀礼で山間草地を焼き、その大きな煙が上がったのを見て、翌月がロリ郡の苦い月であることを知った」という発言があった。また TD 氏によると「ある時、ランボヤ郡の男が水牛の糞便にまみれて笑い愉しんでいた。これがポドゥ儀礼期間にランボヤ郡で起こる奇行だ。それを見てランボヤ郡の苦い月であることを知った」という。このようにして、相互に直接の交信がなくとも、煙や奇行といったシグナルで、ランボヤ郡からロリ郡に季節が伝わったのである。そしてこれらのことは、上記の長い年と短い年という話で、ロ

リ郡の苦い月開始が平均的に秋分の1ヵ月後になることと一致する。

また祭司TA氏と女性TD氏によると「ロリ郡の苦い月は、皆のための苦い *Podu Toumadangu* 月とも呼ばれるものであり、ロリ郡だけでなくすべての地域に年末を伝える儀礼である」ということであった。実際、ロリ郡のポドゥ儀礼はランボヤ郡のものに比べてもはるかに盛大であり、30日ほどかけて行なわれる。さまざまな禁忌や非日常的行為の後に、家族全員が各地から中核村に戻って、最終日の儀礼を行なうことで、禁忌からの解放を迎え、新年となる。

一方、ワノカカ郡での男性祭司WA氏（60歳代）によると、「ワノカカ郡では苦い月はそれほど重要ではなくポドゥ儀礼も行なわない。しかし、ロリ郡のポドゥ儀礼は盛大なので、開始と終了時期についてはおのずから情報が伝わってくる」ということであった。したがって、ランボヤ郡の天体観測で始まる苦い月は、ランボヤ郡とロリ郡の大儀礼を経て、最終的にはランボヤ郡、ロリ郡、ワノカカ郡にその時期の到来を伝えうるのである。

続いて苦い月が果たす機能について述べる。スンバ島では、雑穀やトウモロコシなどの畑作のために、雨季開始前に草を焼き、耕起棒で天地返しをしておく必要がある。雨季開始とともに、雨が土を細かくし、そこに種を撒くことで雨季中に2-3回の収穫を得られる [古川 1991]。草地焼きや天地返しの時期が雨季開始に合わなければ、作物に十分な養分と水分を与えられず、十分な収穫を得ることが困難になる。苦い月はちょうどこの雨季開始直前の時期に一致する。

つまりこれらをまとめると、ランボヤ郡では直前の月が何であるかにかかわらず太陽観測に基づいて苦い月になり、ロリ郡はそこで儀礼が行なわれたことを知り苦い月になる。この頃に両郡の人々は乾季の終わりを知り、畑作のために草地を焼き、農地を用意しておく。やがて最初の雨が降り、新年が訪れ、畑作農耕が本格的に開始されるのである。ここで、もし新年になったにもかかわらず雨が降らないとなると、ランボヤ郡の太陽観測が間違っただけではないかとか、今年は異常気象なのではないか（例：図2の2014年）、ということが周知され、それに応じて畑作が調整されうることになる。

4.2 ゴカイ月の置閏法・同期法とその機能

表3は2015年～2017年のランボヤ郡とワノカカ郡におけるパソーラ儀礼の開催日とその直前の満月と新月の日である。⁹⁾ いずれも満月の後6日～8日程度で開催されていることが分かる。ランボヤ郡とワノカカ郡の間は、ほぼ1朔望月であることも分かる。しかし満月から

表3 ランボヤ地方とワノカカ地方のパソーラの日取り

	ランボヤ地方			ワノカカ地方		
	パソーラ開催日	直前の満月	直前の新月	パソーラ開催日	直前の満月	直前の新月
2015年	2月12日(木)	2月4日(水)	1月20日(火)	3月12日(木)	3月6日(金)	2月19日(木)
2016年	2月2日(火)	1月24日(日)	1月10日(日)	2月29日(月)	2月23日(火)	2月8日(月)
2017年	2月18日(土)	2月11日(土)	1月28日(土)	3月18日(土)	3月12日(日)	2月26日(日)

の日数が数日異なるように、ゴカイ類が群泳する予測日とパソーラ儀礼の日取りは、それぞれの地域の判断で決定される。なお、ゴカイ類はロンボク島と同様に大雨と結び付けられており [五十嵐 2017]、その群泳が起こった後は暴風が止み、田植えに適切な季節と認識されている (ランボヤ郡祭司 HA 氏・ワノカカ郡祭司 WA 氏)。

置閏法として、先に書いたとおりランボヤ郡では祭司 HA 氏が太陽が東南東 116° の方角から太陽が昇るときを見ている。スンバ島は赤道と南回帰線の間に位置しており、したがって真東より南から太陽が昇る時期は短く、むしろ北側から太陽が昇る時期が長い。そして日本でいう冬至つまり 12 月 21 日頃が最も南から昇る時期である。理論上それは東南東 114° 程度になる。ここで筆者による測定が 2° 誤差があるとすれば、ランボヤ郡の祭司 HA 氏がいわゆる冬至を測っていた可能性が生じる。表 3 をみると 2016 年にランボヤ郡のゴカイ月が 1 月 10 日の新月から始まったこと、および 2015 年には 1 月 20 日に始まったことはこの可能性とは矛盾しない。しかし、2017 年のランボヤ郡のゴカイ月が 1 月 28 日の新月から始まったことからすると、冬至よりは少し後の季節を観測していると考えのほうが自然である。その場合は、方位としては 114° 未満になるはずであり今後改めて精密な計測を試みたい。

ランボヤ郡ではゴカイ月の満月頃からさまざまな儀礼が営まれ、予測日前日にケレウェイ浜に祭司や住民たちが集合する。そして当日早朝になり、神聖なる馬が浜辺に到着し、小規模な模擬戦が始まると同時に、祭司 (男性 40 歳代、役名 *Rato Nale*、以下 HB 氏) が海に入りゴカイ類を観測する。その後、内陸にある広大なパソーラの祭場に移動する。興味深いことには、ランボヤ郡の場合では「出現予測日」にゴカイ類が「出現してはならない」ことになっている (祭司 HA 氏・HB 氏)。これにまつわる神話は後述する。いずれにしても、ゴカイ類の生殖群泳は年に 1 回ないし 2 回程度であることからすれば、出現しないことを確認することで、まだその季節ではないことを確認できると考えられる。もしも出現した場合には、それは凶兆であるとされる (祭司 HA 氏・HB 氏)。もしもゴカイ類が出現してしまうと「雨が降るのが終わってしまい、田植えができなくなる」(HA 氏) ということであった。ランボヤ郡ではゴカイ類が出現するより 1 ヶ月前にパソーラ儀礼を行なうつもりが、もしも出現してしまったということは、雨季の残りが予測よりも 1 ヶ月ほど短いことになるからと考えると、合理的であると考えられる。

一方、ワノカカ郡ではランボヤ郡のパソーラ儀礼が行なわれると、その翌月の満月の後にパソーラ儀礼を行なうこととなる。筆者が 2016 年に観察したところではこの時期になると集落の間で祭司が往来し、さまざまな準備的儀礼が行なわれる。郡内ではワイガリ村が中核村 (*ina-ama* : 父母の意) であるが、郡内にある山上村ウブベウイ村が天体観測を行なっている。

9) このうち筆者が直接参加したものは 2016 年 2 月 29 日のワノカカ郡と、2017 年 2 月 18 日のランボヤ郡である。

ウブベウイ村ではさまざまな儀礼が行なわれ、筆者もその一部に参加を許されたが、夜明け直前に天体を観測する儀礼には立ち会うことが許されなかった。参加者に聞くと、「月の位置を見て、パソーラ儀礼の開催日と、ゴカイ類が発生する時間を読む」（祭司 WA 氏）ということであった。この際に何かの恒星を見るか、太陽を見るか、ということを繰り返し尋ねたが、回答としては「恒星を見るのではなく、月の位置を見る」（WA 氏・WB 氏（男性祭司・60 歳代））ということであった。しかし、月の位置という意味を検討すると、天体の星々の中でどこに月があるかを見ていると解釈することもできる。五十嵐 [2017] は、小スンダ列島ではゴカイ類群泳の日を予測するために、特定の恒星と月との位置関係を見ている事例のあることを述べている。たとえば夜明け前の天体を毎日見た場合に、その時間の月がおとめ座 α 星スピカに最接近するのがゴカイ類の 1 回目の群泳日であるとされる。そしてその 1 朔望月後には、やはり同じ時間帯に月がアンタレスに最接近する日があり、それが 2 回目のゴカイ類発生日であるとされる。

他にもゴカイ類発生予測日前日未明には、ワイテナ Waitena 浜でパジュラ（集団ボクシングの儀礼）が行なわれるが、これは祭司たちが浜辺で波を見るときに行なわれる儀礼であり、潮汐を観察していると考えられる。このようなことから、ランボヤ郡の天体観測に加えて、ワノカカ郡でも天体観測や自然の観測を行なって、ゴカイ類の群泳日を見極めている可能性がある。しかし前後の別の月にこのような観測を行わないことや、月ではなく日を特定することが目的となっているため、直前の天体観測・潮汐観測により意識的に閏月を挿入することは行なわれていないと考えられる。

さてパソーラの儀礼ではゴカイ類出現予測日の前晩から郡内の全祭司がウブベウイ村に集まり、月の位置を確認したのち、午前 3 時頃から徒歩で海辺に向かって歩き出す。やがてワノカカ浜にたどり着き日が昇るのを待つ。日が水平線の向こうに昇り始めた頃 2 人の祭司が念入りに海を調べ、ゴカイ類¹⁰⁾ が出現することを確認する。祭司が最初にゴカイ類をすくったとき、もしその体がちぎれると大雨で稲が腐り、もし手にかみつくとネズミに作物を食われるとされている。群泳が確認されると、住民たちも一斉にゴカイ類を集めて、やがて食事に供される。その後、浜辺でパソーラが始まるが、これは本番ではなく、午前 10 時頃から正式の祭場でパソーラが始まる。

パソーラが終わると田植えが行なわれる。ランボヤ郡とは対照的に、ワノカカ郡でゴカイ類が予測日に出現しないと「大雨が降って田植えの稲がだめになる」（祭司 WA 氏・祭司 WB 氏）という。もしもランボヤ郡でも出現せず、ワノカカ郡でも出現しない場合というのは、出現日はそれよりもさらに 1 ヶ月後であると考えられ、そうするとその時はまだ暴風雨の時期が終

10) 筆者が 2016 年 2 月 29 日に観察したところでは、ワノカカ浜に出現したゴカイ類は複数種が混ざっていた。サモアで記載されたイソメ科の太平洋パロロと思しき種はその一部に過ぎず、ゴカイ科などの種が混ざっていた。

わっていないからであると考えると合理的である。

ゴカイ月にまつわる同期法としては、このようにランボヤ郡のゴカイ月の 1 朔望月後がワノカカ郡のゴカイ月になることである。そして前者ではゴカイ類が発生せず、後者ではゴカイ類が発生するのである。パソーラ儀礼は郡を超えて騎馬の参加者と、観客の参加者がある大祭であるが、ゴカイ類が予定外に出たり、あるいは出なかつたりすると、大いなる凶兆として参加者全員が知ることになる。逆にいえば、儀礼を通して、暦が正確であるか否か、何かしらの異常気象にあるか、ということが知れ渡るのである。

この同期法にまつわるひとつの神話を要約して紹介する。これはワノカカ郡の祭司 WB 氏から聞いたものであるが、類似の話はワノカカ郡やランボヤ郡で広く聞かれた。

かつてワノカカ郡の男ウブドゥラ Ubu Dulla が漁に行っている間に、村にいたその妻ラブカバ Rabu Kabba がコディ地方の男と恋に落ち、連れていかれてしまった。そこでウブドゥラはワノカカ郡の屈強な男たちを連れ、妻を取り返すべく船で海岸沿いにコディ地方へと向かった。途中、ランボヤ郡、ガウラ地方に立ち寄って、ついにコディ地方に着いた。コディの人々は水牛や黄金などの財産を差し出したが、ウブドゥラは目もくれずに妻を取り返そうとした。しかしそこで、それまで嗅いだこともない良い匂いが漂ってきた。それはコディの庶民が食べているゴカイ類ニャレであった。ウブドゥラははじめてニャレを味わい、あまりの美味しさに、妻も財産もいらぬがニャレが欲しいと言い、たくさんのニャレを袋に入れて、それだけを持ち帰ることにした。帰る途中、ウブドゥラはランボヤ郡で陸に上がり、木にニャレの入った袋をかけて休憩をした。すると、ランボヤ郡の人々があまりに良い匂いに引き寄せられてきた。ランボヤ郡の人々はニャレを食べさせてくれと願ったが、ウブドゥラは貴重なものであることを理由に与えなかった。するとランボヤ郡の人々は、ウブドゥラがみしていない隙に、袋から垂れ落ちるゴカイの汁を、両手にためて、それをすすって喜んだ。それに気が付いたウブドゥラが、そのようにさみしいことをするランボヤ郡には今後ニャレが現れることはないであろうと言った。

この神話では、ランボヤ郡で先にパソーラ儀礼を、その後ワノカカ郡でパソーラ儀礼を行なうこともこの時決められたとされている。このように両郡でそれぞれ太陽や恒星を観測し、自然の周期を観測し、それらをクロスチェックする技術によって、田植えの時期と雨季の終わりが周知されるようになっているのである。¹¹⁾

11) 西南スンバ県に位置するコディ地方では 2 月に出現する村と 3 月に出現する村がある。2 月に出現するべき村で出現しなかった場合には、「コディ地方に今年は雨が降らない。代わりに雨は 3 月にワノカカ郡で降るだろう」と言って、その年は水田よりも畑作に力を入れるという [Hoskins 1993: 339].

4.3 その他の月

続いて苦い月・解放月とゴカイ月以外の月についても、小スンダ列島をはじめとする近隣地域の事例も考慮しながら検討を加える。

まず巣作りの月は東スンバ県各地でも *Hibu* または *Habu* として呼ばれる月名である。ホスキンスは、これをコディ地方での聞き取りをもとに鳥の巣作りであるとしており、渡り鳥には営巣の季節があるとすれば季節の目印となりうる [Hoskins 1993]。また五十嵐はインドネシア各地の月名を分析した結果これは「巣ごもり」を意味し、スンバ島東部におけるフォースの研究 [Forth 1983] にあるように、それが暗喩するのは恒星の伏であるとした [五十嵐 2014, 2017]。つまり特定の恒星が見えない時期を表すというのである。これらの前提に基づき、ワノカカ郡で聞き取りを行なった。ワノカカ郡ではグレゴリオ暦1月前後のこの季節にヒウパアナ *Hi'u Pa-ana* 儀礼という大祭を行なう。ヒウパアナ儀礼には参加することができず、儀礼の詳細については記すことができない。しかし、鳥ではなく豚の巣作りないし巣ごもりを意味することが明らかになった [Gunawan-Mitchell 1981; Mitchell and Gunawan 2008a]。このため鳥に比べると季節性が弱いと考えられる。また、この開催日について、その日取りを決定する祭司 WA 氏からの聞き取りでは、恒星や月の満ち欠けは関係がないということであった。ただし、ワノカカ郡では新年の時期が曖昧であり、解放の月もあまり意識されていないが、巣作りの月が新年だと答えることが多かった。

また調査対象の3郡を含め、ホスキンスが調べたスンバ全地域の暦に登場するのが花の名前、マンガタの月である。サブ島ではオウギヤシの開花が置閏法になることがある [Fox 1979]。マンガタが何の花であるかを知っている住民はほとんどいなかったが、ロリ郡の祭司 TC 氏に案内を頼み、ランボヤ郡との境界に近い山間草地で探してようやく見つけたものはラン科サギソウ属の植物 (*Pecteilis* sp.) であった。スンバ島の植物誌が未整備であるため、種まで同定することはできなかった。TC 氏らによると雨季の半ばになると草地の中にマンガタの白く美しい花が咲くようになり、その時期が来たことが分かるという。サギソウ属の一般的な性質からすると、湿度が必要であるためサバナ気候の島内で野生の生育地域は限られ、また雨季開始の時期や雨量によって開花時期が左右されると考えられる。このためマンガタの花は数週間の自然の流動性があり、置閏法・同期法としては精度が高いとは考えられない。¹²⁾

これまでに挙げた月が雨季に集中していたが、表1で挙げたとおり、乾季の月名で特徴的なのは農業や生業に関するものが続くことである。これらの月は、いずれも季節の変化を緩やかにとらえるものであるが、特定の時期を高い精度で特定できるものではない。そのため置閏法として用いることは難しいと考えられる。

12) 実際、筆者が花を確認したのは2016年3月であり、この年はエルニーニョ現象の影響で雨季開始が1-2ヵ月遅れたとされたときであったが、2017年の2月に訪れたときはすでに花は枯れた後であると知らされた。

5. 実際の暦の運用

5.1 知識のばらつき

先行研究においても在来暦法の月名をすべて知っているインフォーマントは少ないとされている。また研究者によっても記録された月名が異なる。たとえばホスキンスの記録では、ワノカカ地方ではゴカイ月の後、グレゴリオ暦 4 月頃が若いイモの月になり、続いて、熟した月→赤い稲の月→黒頭の月→塩づくりの月→名前が無い月の順に進み、10 月頃にランボヤ郡の苦い月を迎えるが [Hoskins 1993]、ミッチェルとグナワンによると若いイモの月の後は、塩づくりの月→熟した月→赤い稲の月→名のない月→黒頭の月ときて、ランボヤ郡の苦い月になるとされ [Mitchell and Gunawan 2008b],¹³⁾ 順番がまったく異なるのである。

そこで筆者がこの 2 つの先行研究に、ワノカカ郡で収集した祭司 WA 氏と同 WB 氏の知識を加えて比較したのが表 4 である。他の 2 郡とは異なりポドゥ儀礼が無く、新年は巢作りの月から始まるという意見があったため、ここでは巢作りの月（グレゴリオ暦で 12-1 月頃）から並べている。表中で月名が太字になっているのは、計 4 人のインフォーマントがプラスマイナス 1 ヶ月の範囲内で同じ月名を挙げたところである。このように比べると、回答された月名ないし月順は 4 者でばらばらであった。ただし共通する特徴として、苦い月が始まる頃から、ゴカイ月の翌月まで、つまり雨季の始まる頃から、終わりまでの月名がほぼ同じで、乾季での月名が大きくばらつくことが明らかになった。なおホスキンスとグナワン＝ミッチェルは苦い月の前に名前が無い月があることを記録しているが、グナワン＝ミッチェルによると季節と在来暦法上の月を一致させるために、この月が不規則に用いられることがあるとしており [Gunawan-Mitchell 1981: 419]、無自覚な置闰法としての役割を果たす場合があると考えられる。

続いて表 5 は、ランボヤ郡の暦を、ホスキンス [Hoskins 1993] とヘイルナエルト＝マルティン [Geirnaert-Martin 1992] および祭司 HA 氏の知識で比較したものである。ここでは新年は解放の月（グレゴリオ暦 11-12 月頃）から始まる。ゴカイ月で雨季が終わる少し前までは同じ月名であるが、その後乾季はばらばらになる。そして苦い月の頃になると、再び同じになるのである。なお祭司に聞き取りをする場合でも、乾季の月名には言葉を窮することもあり、たとえば第 6 月を *Lima*（ランボヤ語またはインドネシア語で数字の 5 を意味する）と回答したが、これはグレゴリオ暦で「5 月」という趣旨で答えたのであり、在来知識では無いこ

13) ミッチェルは医務官としての長年にわたるワノカカ郡滞在をもとに 1984 年に同郡の暦について発表を行なっている [Mitchell 1984]。グナワン＝ミッチェルは同郡にて民族誌調査を行ない、博士論文を執筆している [Gunawan-Mitchell 1981]。両者が公表している調査結果のうち最新のものはインターネット上に掲載されたものであることから、これを引用する。

表4 ワノカカ郡における月名・月順の比較—2つの先行研究と2人の聞き取りによる

月順	第1月	第2月	第3月	第4月	第5月	第6月	第7月	第8月	第9月	第10月	第11月	第12月
	グレゴリオ暦におけるおよその時期											
	12-1月	1-2月	2-3月	3-4月	4-5月	5-6月	6-7月	7-8月	8-9月	9-10月	10-11月	11-12月
Hoskins [1993]	Hi'u Nyale Laboya	Nyale Laboya	Nyale Wanokaka	Ngura	Tua	Bada Rara	Metingo Katiku	Oting Mahing	Dapangara または Pidu Tou Dangu	Pidu Laboya	Kabba	Mangata
Gunawan-Mitchell [1981]	Hi'u Nyale Laboya	Nyale Laboya	Nyale Wanokaka	Ngura	Otingu Mahing	Tuwa Rara	Bada Rara	Dapa Ngara	Metingu Katiku	Pidu Laboya	Pidu Tou Dangu または Kalangu	Ka'a
WA男性祭司・60歳代	Hi'u Nyale Laboya	Nyale Laboya	Nyale Wanokaka	Ngura	Meting Katiku	Bada Rara	Tua	Oting Mahing	Pidu Laboya	Pidu Laboya Wawa	Pidu Tou Dangu	Ka'a
WB男性祭司・60歳代	Hi'u Lamboya	Wanokaka	Wanokaka	Ngura	Meting Katiku	Bada Rara	Oting Mahing	Palu Dong	Podu Laboya Bawa	Podu Tou Dango	Podu Tarung Waitabar	Mangata または Ka'a

* 太字は複数の情報源の間で前後1ヵ月以内で同じ月名が登場した月名。

表5 ランボヤ郡における月名・月順の比較—2つの先行研究と1人の聞き取りによる

月順	第1月	第2月	第3月	第4月	第5月	第6月	第7月	第8月	第9月	第10月	第11月	第12月
	グレゴリオ暦におけるおよその時期											
	11-12月	12-1月	1-2月	2-3月	3-4月	4-5月	5-6月	6-7月	7-8月	8-9月	9-10月	10-11月
Hoskins [1993]	Kabba Mangata	Nale	Gouru	Nale Moro	Ro Huli	Nale Ngisi	Nale	Nale Mabou	Kabba Ro Yayu ¹⁾	Kabba Ro Pari Biru	Podu Lamboya	Padu Patialla
Ger-naert-Marrin [1992]	Kabba Ro Yayu	前半 Nyale Laboya	後半 Nyale Renga	前半 Nyale Wankaka	Nyale Ngura	Nyale Ngihi	前半 Magowo Wulu Hura	後半 Nyale Pare Biru Tu	Nyale Mabu	Patina Mahi	Padu Laboya	Padu Paryala
HA男性祭司・70歳代	Kabba Ro Yayu	Nyale Lamboya	Nyale Wankaka	Mahera Makahi Kari	Lima または月名なし	Wolu Hura	Wolu Hura	Kabba Pari Beru	Kuru Tanah	Siwa (Bani Diha) ²⁾	Podu Lolina	Podu

* 太字は複数の情報源の間で前後1ヵ月以内で同じ月名が登場した月名。

注1) 表2のKabba Ro Yayuで説明してあるとおり、ランボヤ郡ではPadu (またはPodu)の後がKabbaもしくはKabba Ro Yayuになるべきはずであり、Hoskins [1993]がこの月を7-8月に位置付けていることは誤記であることが疑われる。

注2) SiwaとBani Dihaはいずれも数字の9を意味する。

とは明らかである。またやはりグレゴリオ暦 8-9 月頃を「9 月 (*Siwa* または *Bani Diba*)」と回答したがこれも月名が無いことを意味する。後者は年末に近い時期であり、無自覚な置閏法のように [五十嵐 2017], 年末をあえて数えない場合がある可能性がある。

表 6 はロリ郡のものである。この郡についてはホスキンス [Hoskins 1993] 以外に詳細な研究がないため、多くのインフォーマントに聞き取りをした。ここでも新年は解放の月から始ま

表 6 ロリ郡における月名・月順の比較—1 つの先行研究と 4 人の聞き取りによる

情報源	第 1 月	第 2 月	第 3 月	第 4 月	第 5 月	第 6 月
	グレゴリオ暦におけるおよその時期					
	11-12 月	12-1 月	1-2 月	2-3 月	3-4 月	4-5 月
Hoskins [1993]	Koba	Mangata	Nale Lamboya	Nale Wanokaka	Nale Mubbu	Ngura
TB 男性 祭司・60 歳代	Koba	Mangata	Nale Laboya	Wanokaka	Nale Mobu	Ngura
TC 男性 祭司・40 歳代	Koba	Mangata	Nale Laboya	Nale Wanokaka	Nale Mobu	Ngura
TE 女性・80 歳代	Koba	Mangata	Nale Laboya	Nale Wanokaka	Nale Mobu または Ngura	Tua
TF 男性・70 歳代	Koba	Mangata	Nale Laboya	Nale Wanokaka	Nale Mobu	Ngura

情報源	第 7 月	第 8 月	第 9 月	第 10 月	第 11 月	第 12 月
	グレゴリオ暦におけるおよその時期					
	5-6 月	6-7 月	7-8 月	8-9 月	9-10 月	10-11 月
Hoskins [1993]	Boda Rara	Meting Katiku	Menamo	Pattina Mesi	Podu Lamboya	Podu Lolina
TB 男性 祭司・60 歳代	Tua	Meting Katiku	Manomo	Kadekara または Tai Na Mesi	Podu Laboya	Podu Lolina または Podu Touma Dangu
TC 男性 祭司・40 歳代	Tua	Badi Rara	Meting Katiku または Sarubu	Kadekara	Podu Laboya または Podu Baliledo	Podu Lolina
TE 女性・80 歳代	Badi Rara	Meting Katiku	Kadekara	Taina Maesi	Podu Laboya	Podu Lolina
TF 男性・70 歳代	Tua または Badi Rara	Sarubu または Meting Katiku	Manamo	Kadekara	Taina Mesi または Podu Laboya	Podu Touma Dango

* 太字は複数の情報源の間で前後 1 ヶ月以内で同じ月名が登場した月名。

注) 他に 60 歳代の女性 (TG 氏) にも聞き取りをしたが、新年から Koba, Mangata の順であるが、そのあとは分からないという回答であった。

り、ゴカイ月が過ぎ幼いイモの月までが同じで、その後乾季になるとばらばらになる。村人総出となるグレゴリオ暦7月前後の黒頭の月だけ共通するが、再びばらばらになり、ランボヤ郡の苦い月から一致するようになる。つまり雨季で知識は共通し、乾季でばらつくのである。なお、他に高齢者女性にも聞き取りを試みたが、最初の2ヵ月の名前を何とか考えたが、それ以降については知らないと回答されたこともあった。若い世代では、祭司を除いては、月名を知っている人はかなり稀であった。また3郡を共通してであるが、1つの時期に2つ以上の月の名前があると言われることもあった。

これらの比較から明らかになったことは、(1) 暦の知識にはばらつきがあること、(2) ばらつきは乾季で起こり、雨季は知識が一致すること、(3) 雨季が始まる苦い月の直前の月名もばらつくこと、である。

5.2 柔軟な暦の運行

また現地での観察と聞き取りをする中から、暦の運行が柔軟に変更されることも明らかになった。たとえば2015年10月24日にワノカカ郡を訪れて祭司WA氏らに聞き取りをしたとき、その日はランボヤ・バワ地方の苦い *Pidu Laboya Wawa* 月であるとの回答を得た。¹⁴⁾ 続いて2016年2月にワノカカ郡のパソーラ儀礼調査に訪れたところ、同氏はワノカカ郡のゴカイ月であるから2月29日にパソーラ儀礼をすると説明した。月齢表を確認すると、この2回の訪問の間に朔望周期でいえば3回しかなかった。しかし表4に示されているとおり、この祭司(WA氏)が事前に回答したところでは、ランボヤ・バワ地方の苦い月の後は、皆のための苦い月→解放の月→巢作りの月→ランボヤ郡のゴカイ月という4つの月を経て、ようやくワノカカ郡のゴカイ月に至ることになっており、規範的な月順と実際を照らし合わせると、どこかで月を飛ばすなどが行なわれたことになる。

WA氏と他の祭司の説明によると、巢作りの月となりヒウパアナ儀礼を行っていた期間中(グレゴリオ暦の2016年1-2月)に、ランボヤ郡でパソーラ儀礼(同2月2日)が行なわれるという情報が伝わってきた。その時、その月をランボヤ郡のゴカイ月とみなし、翌月をワノカカ郡のゴカイ月とみなしたという。つまりひとつの朔望月に、2つの月名を重ねたのである。これに関連して祭司らは、ヒウパアナの儀礼は朔望周期に従うものではなく、巢作りの月では月の満ち欠けを数えていないと説明した。それは、この時に月が重複するあるいは置き換えられることは矛盾にはならないと主張しているようであった。まずランボヤ郡のパソーラが行なわれることで事後的にその月がランボヤ郡のゴカイ月と名付けられ、それがワノカカ郡でのゴカイ月とパソーラ儀礼の時期決定に結び付くのであると考えられる。

また儀礼については、少数の祭司たちによって決定され行なわれるのであり、住民は月を数

14) なおこの時ロリ郡では、ロリ郡の苦い月でありボドゥ儀礼の最中であった。

えて儀礼を待っていることはない。ロリ郡でも一般の人々は月名を知らず、祭司が儀礼日を決定することで、その季節を知ることができた。祭司によって儀礼の日取りが周知されることによって、やはり事後的にその月名が、大衆の間で認識されることになるのである。

知識のばらつきと柔軟な暦の運用をまとめると、規範的な月名・月順は柔軟に変更しうるものであり、ただし苦い月とゴカイ月の開始だけは厳密に太陽・太陰・自然周期と同期されている。ここで、直前が何の月であるかにかかわらずに苦い月が始まり、しかもワノカカ郡やランボヤ郡ではその前に名前が無い月があることは、無自覚な置閏法のような調整〔五十嵐 2014, 2017〕が行なわれていることを示唆する。ただしゴカイ月に至る過程で月を短縮する、飛ばす、置き換える、ないし2つの月名が重複されることからすると、同期のために月数の調整はむしろ自覚的に行なわれる側面もある。これらの判断は、祭司が儀礼日を決定することで周知され、一般大衆は在来暦法の知識は必要なく一律に同期される。

5.3 現代化の様相から

これまで在来暦法について述べてきたが、実際の生活においては、グレゴリオ暦が日常的に用いられる。そこで以下では、グレゴリオ暦のカレンダーと在来暦法、それからインターネットやスマートフォンなどの技術が普及する中での在来暦法の在り方を概観する。

まず1980年代のコディ地方では、パソーラ儀礼を観光資源化しようとする州政府・県政府によって、開催日をグレゴリオ暦にしたがって早く決定することが求められていた。しかし、早期に開催日を決定した結果、当日にゴカイ類が発生しないことが起こり摩擦を生じていたとされる〔Hoskins 1993〕。筆者が訪れた2015年～2017年では、コディ地方のパソーラ儀礼は1ヵ月以上前から決定され、政府や観光局のホームページ等に掲載され、インドネシアに拠点を置く旅行代理店でも情報を得ることが可能であった。そしてコディ地方ではパソーラ開催日にゴカイ類が発生することはむしろ稀であり、両者が一致しないことは問題とならなくなっていた。

しかし、本研究の3郡においては傾向は異なった。特にワノカカ郡の祭司らは、政府による管理には従わないことにしたと明言した。数年前までは政府の要請に応じたこともあったが、1ヵ月以上前に開催日を決定した結果、開催日にゴカイ類の生殖群泳が起らなかった。これはパソーラ儀礼を商業化したことに、祖先神マラブが怒りを示した結果であると認識され、その怒りを鎮めるための儀礼が必要になったという（祭司WA氏）。実際に2016年には、開催2週間ほど前に州政府に開催日を伝えたものの、結局1週間ほど前に改めて開催日を1日ずらした。それでもパソーラにはたくさんの人が集まり祭司は良かったと認識していた。

またマラブ信仰をやめ、キリスト教徒になった住民が増えたことで、安息日である日曜日を避けるという傾向も起こっていた。特にコディ地方はキリスト教が広まり、2014年～2017年までのパソーラ開催日を調べたところ、日曜日が避けられていた。キリスト教の影響が少ない

とされるランボヤ郡やワノカカ郡でも2015年～2017年に日曜日に開催された例はない。ただしワノカカ郡については、あくまで月の位置を見て最終的な日取りを決めているという説明であった。

現代的技術の影響もみられた。ロリ郡はワイカブバック市に隣接しており、3郡の中で最も現代化しているが、そのポドゥ儀礼はパソーラ儀礼に比べると観光資源化されておらず、政府からの圧力や、キリスト教徒への配慮も弱いようであった。ただし先述のとおり、祭司TA氏はスマートフォンのカレンダーアプリと月齢アプリを駆使しており、在来の月や儀礼をグレゴリオ暦の中に記録していた。祭司によってはインターネットで太陰太陽暦であるタイ暦やバリ暦を見て、日程決定の参考にするということであった。

こうしたことは、スンバ島西部が外部社会に由来する各種の情報に影響されていることを示している。しかし、前節までにみてきたようにスンバ島西部の暦法は苦い月、ゴカイ月での進行さえ厳密に行なわれれば、他の月については柔軟である。そのため、現代の状況にも対応することができる。たとえばグレゴリオ暦のスマートフォンアプリと在来暦法の間で矛盾が生じるようなことはなく、グレゴリオ暦導入によっても在来暦法を継続と両立できるものである。摩擦が生じるのは、政府の管理によって田植えの季節を読み間違えることが、信仰上だけでなく生存上の問題にもなる場合であると考えられる。

6. シグナル伝達としての在来暦法論

これまでの結果に基づき、スンバ島西部の在来暦法について次の諸点を指摘することができる。

先行研究では、ひとつの月の時間的長さは太陰周期が単位であり、その時間認識は各郡（言語集団・地域社会）の中で普遍的であるという前提であった。地域の祭司や住民の聞き取りにおいても、規範的にはそのように語られてきた。ここではこれを、タテ方向に太陰周期、ヨコ方向に郡（地域社会）をとる、暦のセル状分析と呼ぶ。現代のカレンダーが1日を1つの枠、1ヵ月を1枚に収めるように、単位をセル状で切り離すことと同様であり、本論文でも表1と表4～6は月名をセルに入れて分析した。

しかし、調査の結果では、人々が新月から次の新月までの朔望周期をいつも数えているわけではないことが明らかになった。また個人によって知識が大きく異なり、さらに大半の人はごくわずかな月名しか知らないが、農耕に必要な時期だけは儀礼を通じて全構成員に共有されていることが明らかになった。このように月名が決定され、それが構成員に共有される過程は、シグナルが伝達していく様子にたとえることができる。

時系列で見れば、まず秋分頃を迎えると、ランボヤ地方ホダナ村において太陽が真東から上ることが観測される。これは太陽から人間社会に伝わる「太陽シグナル」と呼ぶこととする

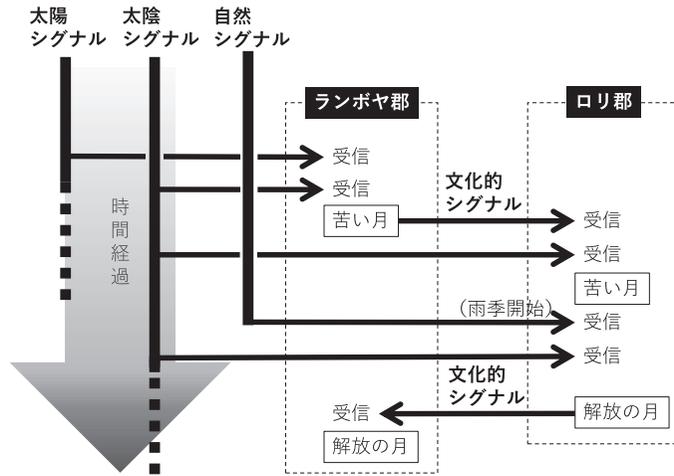


図 4 苦い月をめぐるシグナル伝達の模式図

(図 4). このシグナルをランボヤ郡が受信すると、この時の月が何であるかにかかわらず朔望周期を数え始めて、つまり「太陰シグナル」を受信して最も近い新月から、ランボヤ地方の苦い月が始まり、ポドゥ儀礼が行なわれる。この儀礼を行なっていることは、草地焼きやランボヤ人が奇行をしているという情報として伝わり、これを「文化的シグナル」と呼ぶ。そしてロリ郡はこの文化的シグナルを受信してから朔望周期を数え始めて、最も近い新月からロリ郡の苦い月を始める。ロリ郡のポドゥ儀礼は盛大であり、この文化的シグナルはランボヤ郡、ワノカカ郡に伝わる。そしてそのポドゥ期間を集大成する儀礼が行なわれ、新年すなわち解放の月になり、播種の季節になったことが伝えられる。なお、このロリ郡の苦い月が終わるまでには雨季が始まるはずであり、これは「自然シグナル」である。雨が降らなかった場合には、最初のランボヤ郡での太陽観測の誤りや、今年は異常気象であるという疑いが、おのずと各郡の人々の間に認識されるのである。

その後雨季が始まると、マンガタが咲くという自然シグナルや、ワノカカ郡で大祭ヒウパナが行なわれる文化的シグナルなどが発せられる。月名月順はあるが、郡・地域間や太陽周期と同期するためには欠月することもある期間である。

グレゴリオ暦 1 月頃、ランボヤ郡ホダナ村で東南東から太陽が昇ると、太陽シグナルが受信され、直近の新月からランボヤ郡のゴカイ月となる (図 5)。そしてこの月の満月から数日後がゴカイ出現予測日となりパソラ実施日に決定される。この日に向けて種々の儀礼が行なわれ、そして当日の朝、祭司はゴカイ類が「出現しない」ことを確認する。出現しなければ暦は予定どおりであり、出現したら暦がずれていることが知られることとなる、重要な自然シグナルである。

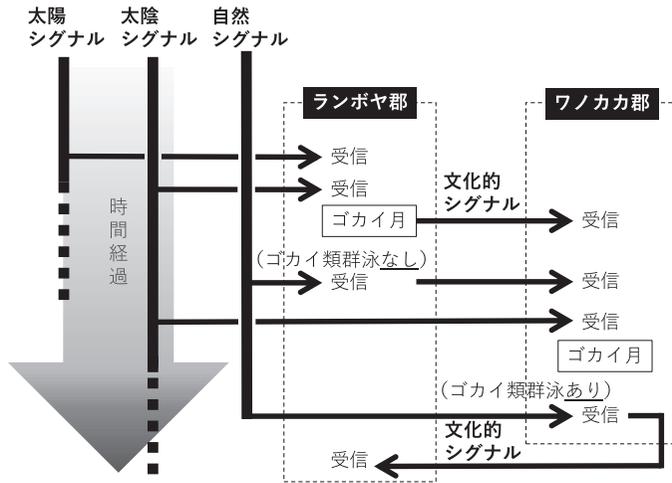


図5 ゴカイ月をめぐるシグナル伝達の模式図

これらのことがワノカカ郡へと文化的シグナルとして伝えられ、次の新月からワノカカ郡のゴカイ月になる。そしてこのゴカイ月の満月から7日～9日後がワノカカ郡のゴカイ類出現予測日でありパソーラ儀礼の日と決まる。そして当日、ゴカイ類の群泳が起こることで、暦が正しいことが確認される。この自然シグナルは暴風雨の時期が終わり田植えをするのに最適の時期を知らせる。もしも出現しない場合には、暦が誤っていることが明確になる。

こうして田植えの農繁期が過ぎ、やがて乾季になる。この頃からは月名月順が固定されなくなる。やがて稲が実り、乾季の半ばに収穫を迎える。¹⁵⁾ 再び雨季が近づいてくると、畑作のために、乾いた大地を天地返しすることになるが、その時期は、再びランボヤ郡が太陽シグナルを受信し、苦い月に入ることによって伝わっていくのである。

本研究ではランボヤ郡、ロリ郡、ワノカカ郡の3郡に絞って分析したが、ランボヤ郡の暦にはパティアラ地方やゴウラ地方など別の地名が現れる。一方、西南スンバ県コディ地方の暦に共通してランボヤ郡の苦い月 *Padu Lamboya* という月があり、その翌月がコディ地方の苦い月 *Padu Kodi* となる [Hoskins 1993]。すなわち、シグナル伝達は今回の調査対象地を超えて、もっと広域で行なわれていると考えられる。

したがってスンバ島西部における暦法は、現代のカレンダーのように毎月同じ時間を刻むものではなくて、シグナルの受信とともに進行するものであり、新たな月もシグナルの受信とともに始まる。そして文化的シグナルなどとして次の社会に伝達されていく (図4, 図5)。このシグナルは対面型コミュニケーションなしに伝えることも可能であるし、事後的に月名が決

15) 本文では割愛したが、ワノカカ郡ではこの頃にパソーラハウルという収穫祭が行なわれるというが、これも朔望周期とは関係ないという。また毎年開催されるものでもない。

まる柔軟な暦を構成する。この場合、山間地で天体を観測する村、海岸部でゴカイ類の群泳を観測する村など、それぞれの間でシグナルを伝達し合うことで、はじめて成立することも着目に値する。

7. お わ り に

スンバ島西部の暦がセルで固定されずに、シグナル伝達になっていることの合理性は、以下のようにまとめられる。

(1) 山間部での天体観測には見落とす・見誤るなど技術的限界があり、海岸部での自然観測（ゴカイ類生殖群泳）には自然の流動性による誤差がありうるが、クロスチェックすることで誤差を抑えられる。

(2) 毎月を必ずしも固定していないことで、クロスチェックのたびに自覚的もしくは無自覚に閏月・欠月も用いて柔軟に誤差を修正することができる。また、誰もがそれぞれに月を数えるのではなく、祭司が儀礼日を決定するたびに月が数えられるために、社会的な混乱なく誤差の修正が行なわれる。

(3) 月を数えることと儀礼が一体化しているために、儀礼参加者を通じて月名やその修正が広範囲に迅速に周知される。

(4) したがって畑作・水田稲作の生業が、その時々状況に合わせて支障なく実施される。

これによれば暦においてセル型の暦と、シグナル伝達型の暦の特徴が対比的に明らかになる。まずセル型の暦は明確な期間と法則があり、社会で全員が同じ暦を共有して時を刻んでいなければ十分に機能せず、そのため高度な天体観測技術と厳格な計算に基づいている必要がある。一方、シグナル伝達型では期間は柔軟で法則は少なく、誰かが暦進行を管理していればよく、祭司以外の人々は無意識・無自覚のうちに季節周期を生活・生業に取り入れることができる。したがってセル型は現代カレンダーの概念そのものであり、シグナル伝達型は在地の時間概念に基づくということができる。

オーストロネシア諸語集団では、たとえばトロブリアンド諸島には天体観測による置閏法とゴカイ類生殖群泳による置閏法が併存していることや [Malinowski 1927; Leach 1950]、ハルマヘラでは1年のうちに6ヵ月しか月を数えない地域があること [Yoshida 1980]、バリ島やロンボク島でも10ヵ月しか数えない地域があること [五十嵐 2017] が知られているが、このような社会もシグナル伝達の暦法としてみるべき可能性がある。

現在、在来暦法をはじめとして、在来知は失われつつあり、特に天体知識の喪失が早い [後藤 2014]。スンバ島西部でも同様の傾向がある。しかし、これまでの論述から明らかなように、在来暦法は柔軟であるがためにグレゴリオ暦のような現代の技術とも並存しうる。また、気候変動のような現代の新たな問題に対しても機能する。ポドゥ儀礼をしたのに雨が降らない

とかパソーラ儀礼をしたのにゴカイ類が群泳しないと、人々は時期のずれを認識し、新たな儀礼を行ない、農耕時期をずらしてきた。異常気象により雨季の開始が遅れたとしても、同様に農耕時期をずらすことで対応できるのである。このように自らの技術的限界や異常気象に対してもレジリエンスを示すことは、この在地の技術の長所である。

結論としては、機能論からみればスンバ島西部在来暦法は、生存に欠かせない季節変化を予測して、それを広範囲に伝達するものであったといえる。技術論からいえば、そのような機能を果たすために柔軟に太陽・太陰・自然周期との調整が行なわれ、その中で太陽周期観測のシグナル、自然周期観測のシグナル、文化のシグナルが伝達されて時間が同期されていた。これは、現代のカレンダーに親しんだものからすれば矛盾を感じるものであるが、在地の時間概念に寄り添ったものであったといえる。本稿で提示したシグナル伝達の観点から、これまで見落とされてきた暦法関連の知識を収集するとともに、在来暦法が再興されることを期待する。

謝 辞

本研究は故・五十嵐忠孝氏（京都大学）が蒐集された膨大な情報・資料および筆者への温かい助言のおかげで可能となった。深甚なる謝意を表するとともに、同氏のご冥福を祈る。また本研究に際してはインドネシア共和国の研究技術省（RISTEK）より調査許可を発行いただいた（許可番号：416/SIP/FRP/E5/Dit.KIX/2015）。加えて筆者を受け入れて、研究に協力してくださった、東ヌサテンガラ州政府および西スンバ島政府の関係各位、ロリ郡・ワノカカ郡・ランボヤ郡の祭司・住民の方々にも心よりお礼を申し上げる。Rikson Siburian 氏（北スマトラ大学）、佐藤正典氏（鹿児島大学）、Yuliane Leda Tara 氏（タルン村）、小谷真吾氏（千葉大学）、故・Ricky Gimin 氏（ヌサチュンダナ大学）、清水華氏（国立国際医療研究センター）から学術的な助言をいただいたことにもお礼を申し上げる。また東京大学東洋文化研究所班研究協力者（2016年度「比較歴史学の方法（主宰：羽田正氏）」）として、同研究所書庫に収蔵されている貴重な文献資料を利用させていただいた。

本研究は以下の研究助成のおかげで実施することができたこと、感謝するとともにここに明記する：日本学術振興会科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「なぜゴカイ類を食べるのか？—アジア・太平洋島嶼部における食料選択の総合的地域研究」（2015年度–2016年度、代表：古澤拓郎）、日本学術振興会『課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業』（領域開拓プログラム）「地域社会の災害レジリエンス強化に向けて—SNS とクラウド GIS を用いた共時空間型地域研究」（2014年度–2017年度、代表：古澤拓郎）。

引用文献

日本語

- 五十嵐忠孝. 2008. 「パリのこよみ・考—現行太陰太陽暦が辿って来た道」『東南アジア研究』45(4): 497-538.
- _____. 2014. 「パロロ、星、在来の暦法」アジアの伝統的暦と天文古記録 研究会口頭発表, 2014年7月25日, 於京都大学.
- _____. 2017. 「インドネシアにおけるパロロ群泳・天体周期と在来暦法の特徴」『東南アジア研究』(印刷中).

- 岡田芳朗. 2002. 『アジアの暦』. 大修館書店.
- 岡田芳朗・神田 泰・佐藤次高・高橋正男・古川麒一郎・松井吉昭編. 2014. 『暦の大事典』朝倉書店.
- 小野明子. 1976. 「スンバ島西部における氏族とムラ」『民族学研究』40(4): 299-326.
- 片山真人. 2012. 『暦の科学』ベレ出版.
- 小池 誠. 2004. 『東インドネシアの家社会—スンバの親族と儀礼』晃洋書房.
- . 2014. 「インドネシア・スンバ島におけるキリスト教の歴史と現状」『桃山学院大学キリスト教論集』49: 273-286.
- 後藤 明. 2014. 「天文と人類学」『文化人類学』79(2): 164-178.
- 佐藤正典. 2006. 「干潟における多毛類の多様性」『地球環境』11(2): 191-206.
- . 2016. 「日本のゴカイ科—特に汽水産種の生殖変態について」『月刊海洋』57: 12-24.
- 杉島敬志. 1990. 「リオ族における農耕儀礼の記述と解釈」『国立民族学博物館研究報告』15(3): 573-846.
- . 2006. 「中部フローレスのアダットの現在」杉島敬志・中村潔編『現代インドネシアの地方社会—ミクロロジーのアプローチ』NTT 出版.
- . 2014. 「東インドネシアにおける狡知と暴力を理解するための複ゲーム状況論」杉島敬志編『複ゲーム状況の人類学—東南アジアにおける構想と実践』風響社.
- . 2017. 「インドネシア・中部フローレスにおける未婚の女性首長をめぐる比較研究—オーストロネシア研究の視点から」『アジア・アフリカ地域研究』16(2): 127-161.
- 富岡憲治・沼田英治・井上慎一. 2003. 『時間生物学の基礎』裳華房.
- 廣瀬崇幹. 2017. 「インドネシア半乾燥地域における生存戦略—人類生態学的研究から見た東ヌサ・テングラ州サブ・ライジュア県の社会と環境」京都大学博士学位論文.
- 古川久雄. 1991. 「マライシアの農耕系譜」『東南アジア研究』29(3): 235-305.
- . 2011. 『オアシス農業起源論』京都大学学術出版会.
- 古澤拓郎. 2016a. 「ゴカイ類の群れに集う人々—食・信仰・宇宙で通ずるアジア太平洋の伝統社会」『日本民俗学』286: 123-124.
- . 2016b. 「ゴカイをみて季節を知る」『究』(12月号) 69: 12-15.

外国語

- A Member of the Samoan Society. 1928. The Samoan Division of Time, *Journal of the Polynesian Society* 37: 228-240.
- Badan Informasi Geospasial. 2016. *Data Spatial Dalam Satu Portal: Geospasial untuk Negeri*. Pusat Pengelolaan dan Penyebarluasan Informasi Geospasial. <<http://portal.ina-sdi.or.id/>> (2017年6月9日)
- Badan Pusat Statistik. 2010. *Sensus Penduduk 2010*. Badan Pusat Statistik. <<http://sp2010.bps.go.id/>> (2017年6月9日)
- Badan Pusat Statistik Kabupaten Sumba Barat. 2016. *Iklim*. BPS Kabupaten Sumba Barat. <<https://sumbabaratkab.bps.go.id/>> (2017年6月9日)
- Barnes, Robert. 1974. *Kedang: A Study of the Collective Thought of an Eastern Indonesian People*. Oxford: Clarendon Press.
- Boro, Paulus Lete. 1995. *Pasola: Permainan Ketangkasan Berkuda Lelaki Sumba, Nusa Tenggara Timur, Indonesia*. Jakarta: Penerbit Obor.
- Forth, Gregory L. 1983. Time and Temporal Classification in Rindi, Eastern Sumba, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 139(1): 46-80.
- Fowler, Cynthia T. 2016. *Biosocial Synchrony on Sumba: Multispecies Relationships and Environmental*

- Variations in Indonesia*. Lanham: Lexington Books.
- Fox, James J. 1979. The Ceremonial System of Savu. In A. L. Becker and A. A. Yengoyan eds., *The Imagination of Reality: Essays in Southeast Asian Coherence Systems*. Norwood: Ablex, pp. 145-173.
- Furusawa, Takuro. 2016. *Living with Biodiversity in an Island Ecosystem: Cultural Adaptation in the Solomon Islands*. Singapore: Springer.
- Geirnaert-Martin, D. C. 1992. *The Woven Land of Laboya: Socio-cosmic Ideas and Values in West Sumba, Eastern Indonesia*. Leiden: Centre of Non-Western Studies, Leiden University.
- Geirnaert, Danielle C. 1989. The Pogo Nauta Ritula in Laboya (West Sumba): Of Tubers and Mamuli, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 145(4): 445-463.
- Greenhill, S. J., R. Blust and R. D. Gray. 2008. The Austronesian Basic Vocabulary Database: From Bioinformatics to Lexomics, *Evolutionary Bioinformatics* 4: 271-283.
- Gunawan-Mitchell, Istutiah. 1981. Hierarchy and Balance: A Study of Wanokaka Social Organization. Ph.D. Dissertation, Monash University, Melbourne.
- Hoskins, Janet. 1993. *The Play of Time: Kodi Perspectives on Calendars, History, and Exchange*. Berkeley: University of California Press.
- Igarashi, Tadataka. 1997. Sidereal-lunar Time Reckoning in Nusantara: A Brief Comparison. In T. Kato ed., *Studies on the Dynamics of the Frontier World in Insular Southeast Asia*. Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, pp. 119-136.
- Kagiya, Akiko. 2010. *Female Culture in Raijua: Ikat and Everlasting Witch-Worship in Eastern Indonesia*. Tokyo: Japan Publications.
- Keane, Edward Webb. 1990. The Social Life of Representations: Ritual Speech and Exchange in Anakalang (Sumba, Eastern Indonesia). Ph.D. Dissertation, University of Chicago.
- _____. 1997. *Signs of Recognition: Powers and Hazards of Representation in an Indonesian society*. Berkeley: University of California Press.
- Kuipers, Joel Corneal. 1998. *Language, Identity, and Marginality in Indonesia: The Changing Nature of Ritual Speech on the Island of Sumba*. New York: Cambridge University Press.
- Leach, Edmund R. 1950. Primitive Calendars, *Oceania* 20(4): 245-262.
- Lipson, Mark, Po-Ru Loh, Nick Patterson, Priya Moorjani, Ying-Chin Ko, Mark Stoneking, Bonnie Berger and David Reich. 2014. Reconstructing Austronesian Population History in Island Southeast Asia, *Nature Communications* 5: 4689.
- Müller, Kal. 1997. *East of Bali: From Lombok to Timor*. North Clarendon: Tuttle Publishing.
- Malinowski, Bronislaw. 1916. Baloma; The Spirits of the Dead in the Trobriand Islands, *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 46: 353-430.
- _____. 1922. *Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*. London: Routledge.
- _____. 1927. Lunar and Seasonal Calendar in the Trobriands, *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 57: 203-215.
- Mitchell, David. 1984. *The Wanokaka Calendar: Fieldnotes and Reflections*. Paper presented at the Workshop on East Indonesian Ethnography, Australian National University, Canberra.
- Mitchell, David, and Tuti Gunawan. 2008a. *Hilu Wanukaka: The Language of Wanukaka*. (<http://www.wanukaka.com/Home/hilu-wanukaka>) (2017年6月9日)
- _____. 2008b. *Wanukaka Lunar Calendar*. (<http://www.wanukaka.com/Home/lunar-months>) (2017年

6 月 9 日)

- Mitchell, David, and Lobu Ori. 2008. *Dictionary Panewe Lolina*. (<http://www.waikabubak.com/panewelolina>) (2017 年 6 月 9 日)
- Monk, Kathryn, Yance De Fretes, and Gayatri Reksodiharjo-Lilley. 2013. *Ecology of Nusa Tenggara and Maluku*. North Clarendon: Tuttle Publishing.
- Needham, Rodney. 1983. *Sumba and the Slave Trade*. Clayton: Monash University.
- _____. 1987. *Mamboru: History and Structure in a Domain of Northwestern Sumba*. Oxford: Clarendon Press.
- Pamungkas, Joko. 2015. Species Richness and Macronutrient Content of Wawo Worms (Polychaeta, Annelida) from Ambonese Waters, Maluku, Indonesia, *Biodiversity Data Journal* 3: e4251.
- Rina, A. Dj. and John Lado B Kabba. 2011. *Kamus Bahasa Lamboya Kabupaten Sumba Barat*. Waikabubak: Dinas Kebudayaan dan Pariwisata Kabupaten Sunba Barat.
- Roos, Samuel. 1872. *Bijdrage tot de Kennis van Taal-, Land- en Volk op het Eiland Soemba*. Verhandelingen Van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen. Batavia: Het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen.
- Scott, William Henry. 1958. Some Calendars of Northern Luzon, *American Anthropologist* 60(3): 563-570.
- Simons, Gary F. and Charles D. Fennig. 2017. *Ethnologue: Languages of the World, Twentieth edition*. SIL International 2017. (<http://www.ethnologue.com>) (2017 年 6 月 9 日)
- Sugishima, Takashi. 2006. Where Have the “Entrepreneurs” Gone? A Historical Comment on Adat in Central Flores, *Asian and African Area Studies* 6(1): 120-150.
- Wacana, Lalu. 1993. *Bau Nyale di Lombok. Proyek Media Kebudayaan*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Yoshida, Shuji. 1980. Time Reckoning, *Senri Ethnological Studies* 7: 89-107.